俳　句　雑　誌

水　明

2021　8月号

令和三年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四巻第八号

《今月のかな女》

母とあればわれも娘や紅芙蓉

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

かな女の句に、母を詠んだ句が多く見られるが、本句から、母との心の通い合いを窺うことができる。母とのたわい無い会話の中で、かな女の幼少期から娘時代のこと、また、母自身の想い出など、話がどんどん弾んでゆく。主婦であることが頭から離れ、今は母を困らせた娘の頃に還っているかな女なのである。紅芙蓉が、当時の華やかでしっとりとしたかな女を映し出している。

（鬼之介・註）

水　明

第1091号

―華の一句―

閨怨（けいゑん）の浅き眠りやほたる降る

正木萬蝶

この句に対し、読者の中で好悪がはっきり分かれると思う。その原因は「閨怨」という言葉にある。日常会話には先ず縁のないこの言葉の意味を知った時、実際にこの経験を持った男女は嫌悪感を示すであろう。そうでない者は、この題材そのものに対して反応を示すことになる。筆者は、厄介な題材を詠み熟した作者の技量を買い、賛辞を贈る。

（鬼之介・推薦）

水明

令和３年
８月号

華の一句　1
祝歌（作品）　山本鬼之介　4
梅雨晴間（近詠）　石山かつ子　6
平林寺（近詠）　境延昭　7
風知草　※雪欄作家近詠鑑賞　松井由紀子　8
硯箱　※季音月評　井口俊晴　10
季音「雪」（同人作品）　星野和葉　矢作水尾　茂木和子　ほか　12
季音「月」（同人作品）　森本早苗　原田想子　丸山マスミ　ほか　19
季音「花」（同人作品）　井上玲子　河野はるみ　田中章嘉　ほか　24
『水明誌』を繙く　寺澤一雄　30・31
現代俳句鑑賞　網野月を　32

☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句　仲田利子　34
更なる挑戦を　染谷正信　36
○自選二十句　本橋稀香　38
隠れた貴石　茂木和子　40
○自選二十句　新暦文　42
夢の途中　日髙道を　44
俳誌望見　梅澤佐江　46

水明集　越田栄子　曲淵徹雄　保坂翔太　ほか　48

水明集作品評　山本鬼之介　60
水琴窟（水明集六月号鑑賞）　池田雅夫　64
山紫集　66
鼓笛集（同人作品）・私の一句　72
句集喝采　近藤徹平　75
水明例会報・各地句会報　76・79
りんどう忌のご案内　84
水明塾のご案内　85
風声・水明発展基金御礼　86・87
後記　88

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

祝歌

山本鬼之介

脇付のゆかしき文やさくらんぼ

止り木の気になる女黒ビール

実家間近しまくなぎ陣を敷く小橋

風青し門出に唄ふ「御立ち酒」

夕焼ととことん語る独り旅

金蔵とおぼしき蔵の片かげり

地廻りのやうなる火蛾を打ちのめす

炎熱やダム湖の底の正一位

梅雨晴間

石山　かつ子

あぢさゐの藍濃き波を二の鳥居

御手洗は磴の途中に青葉風

夏鶯に励まされつつ磴のぼる

千段の階を来て玉の汗

森の香と茅の輪の匂ひくぐりけり

産衣の嬰まあるく抱いて涼しかり

梅雨晴や関東平野一望に

部屋を改修することとなったある日、抽出しの中を整理しているとたくさんの切手と共に彼女の十数年前の手紙が出て来た。

彼女は俳句の先輩であったが途中で突然にお止めになった。しかし一人でこつこつと俳句を生き甲斐としていたのでしょう。

先月、手作りの和綴の句集が送られて来た。四月に百一歳の天寿を全うされたこと。私宛の生前のお手紙も添えられて……。

つつましくどこか凛として、ほんとうに日本女性の見本のような方であった。あれから一度もお便りのなかった彼女の句集との再会であった。つくづくと俳句の縁を考えるこのごろである。

平林寺

境　延昭

街騒を逃れて寺の苔の花

掌を打てば池の緋鯉に見詰めらる

どくだみの蜂起するかに雑木林

読経の途切れとぎれに青葉闇

いかめしき廟の石塔夏の蝶

青葉風梢をわたる鳥の声

梅雨晴の武州の木立ひとり占め

コロナ自粛の折県境を跨ぐのは憚られる。自宅から車で一時間程の新座市の平林寺に出かけた。受付のある総門から山門、仏殿までは参拝自由だが、その先中門と本堂は立ち入り禁止。修行僧はおろか僧形の人も見掛けなかった。

天然記念物と言う境内の雑木林の静謐が収穫であった。林を抜ける風に微かな読経の声が紛れ込んでいた。

〈金鳳山平林寺縁起〉

・南北朝時代にさいたま市岩槻に創建

・川越藩主で幕府老中でもあった松平伊豆守信綱の野火止用水完成の功により、一族の菩提寺平林寺の移転が認められた。境内に野火止用水の一部が遺る。

・本山は京都妙心寺。同派禅専門道場

風知草

◎季音雪欄作家近詠鑑賞　　松井由紀子

◇巣立鳥（五月号）　　西山貴美子

春嵐ゆくらゆくらと笹小舟
今生の別れは白し沈丁花
花は葉に泡沫人（うたかたびと）と歩を合はす

笹舟を浮かべると暫くは岸辺に寄ったり草の根で一回転したりと気儘を楽しむかのよう、春の嵐で水面は波立っているでしょうに。命の果ては闇ではなく仄明るい優しい白の中にと作者は見詰めて居るのでしょう。浅い春沈丁花が香ります。花は葉に、何処へ向うのか人々の歩みは加速します。この頃自然のサイクルも前のめりのように思えます。

古筆見の帽を真深に春の暮
辻駕籠に乗せてもみたし巣立鳥

古筆見（奈良時代から鎌倉時代の筆跡の鑑定士）少し古風で識見豊かな風貌の男、帽子を深く冠り春の日暮れをゆっくりとマイペース。巣立鳥が覚束ない足どりで往来へ。そこで辻駕籠の登場です。劇画めいたお可笑さは作者ならではですね。

◇儘に（五月号）　　茂木和子

音もなく雨の予感の春の闇
球根を植ゑて足したる一杯土

春の闇の季語には仄かな明るさと神秘的で不安な感じがある（飯田龍太）生ぬるい湿り風甘酸っぱい空気の匂い春の闇は少し鬱陶しい。球根を植えるのは楽しい作業です。スコップにもう一杯の土を鉢に足しましょう。仕あげの心配りです。

とりあへず白磁の皿に落椿
蒲公英百事態宣言解除後
舶来のワクチンを待つ山椒の芽

姿そのまま落ちた椿はまだ生きているよう、とても捨てられません。白磁の皿に入れて暫し鮮やかな紅を楽しみます。

長い緊急事態宣言が解けたら外は春でした。たんぽぽが新鮮な感動を呼び起こすなんて今年ならではです。舶来とは輸入品を示す昭和のブランド呼称なのに最新のワクチンに冠するなんて皮肉っぽい。諸々のウップンは芽山椒の若々しい香りと辛みで消すことにしましょう。

◇庭の花づくし他Ⅲ（六月号）　永野史代

パン焼いてふくらんでくる桃の花
イーストの機嫌・不機嫌養花天

パンは作り手の確かな腕で焼きあがるのでしょう。ふくらむのは桃の花だけではありません。お二人のお美味しい日々も豊かにふくらんでいます。イースト菌は繊細、空模様にも人の気持ちにも敏感なのでしょう。穏やかな花曇りの日です。

十二単庭のまはりをしづしづと
アネモネ咲かせ思ひ出せない花言葉
わたくしを踏まないで踏まないでと菫

十二単は薄色の花が幾つも重なって咲く山野草。淡い色どりで庭のまわりを品良く飾っています。アネモネは私も好きでよく咲かせよく描きました。花言葉は「あなたを愛します」菫、踏まないで！が可憐でいとおしい。モーツァルトの歌曲が聴えるようです。（詞はゲーテ）

◇ドラマ館（六月号）　大村節代

春の風あつと言ふ間のモノレール
風光るこの木何の木名札欲し

飛鳥山の小さなモノレール春風に舞い揚がるようです。気持ちも浮き立ちます。樹齢を重ねた大木の瑞々しい緑は花にもまして美しい。CMソングの名曲〝この木なんの木―〟をどんと無造作にとりこんで楽しくも骨太のお句に思えます。

四阿で笛吹く男のどけしや
ふらここの園児手を振る母も振る
デゴイチに風の子あまた散る桜

四阿の男、演奏を披露するのではなく多分小さなフレーズを一心に小返ししているのでしょう。影のようなその姿がのどかな大気に包まれているようです。ぶらんこの母子微笑ましい幸せな情景ですね。D51に群がっているのは風の妖精でしょうか？行く春を花吹雪で飾るメルヘンチックな演出を楽しませて頂きました。

硯箱

◆季音六月　井口俊晴

山々の襞まで甲斐は桃の花　矢作水尾

中央自動車道を甲府に向かってひた走る。笛吹インターチェンジあたりに差しかかると、晴れた空をバックに、高速道路の両側は鮮やかな桃の花で埋め尽くされている。あまりの美しさに、クルマの中で歓声が上がる。正面こそ雪がまだ残る南アルプスの山々だが、ほかは山々の襞の隅々まで、ピンク色をした桃の花であふれている。そう言えば、甲斐の国は全国一の桃の産地だったっけ。

くわんおんの裳裾にけさの花吹雪　大橋廸代

春の朝、思い立って観音様にお参りをした。その時、観音様の裳裾に、はらはらと花吹雪が散りかかった。なんと美しい光景であったことだろう。ところで、お寺の奥に安置されている観音様に、桜の花が散ることってあるだろうか。もしかしたら、作者の幻想なのかもしれない。事実としたら、観音様は建物の外にいらっしゃるはず。そう、和歌山の新西国三十三番霊場の岩屋観音は、山中にある岩窟がお堂になっていて、そこに本尊の観音様がいらっしゃるとか…。

仲春の水音はげし鵜の瀬川　宇田白鷺

いよいよ春本番。山の雪を解かして川の水位は一気に上がり、岩に砕ける水音も激しさを増している。ここ鵜の瀬からは奈良・東大寺のお水取のため、山伏姿の行者や白装束の僧侶らによって「香水」を流れに放つ「お水送り」が毎年行われてきた。神事は千何百年もの間、たとえ戦乱の世であっても絶やさずに続けられた。いま泡立つ鵜の瀬の水面を見ていると、悠久の歴史と、人々の変わらぬ営みに思いが及び、いつしか荘厳な気分になる。

故郷や蛙鳴く田を一望す　岡野順子

「カエルの歌が聞こえてくるよ♪」という、ちょっと賑や

かな童謡を知らない人はいないだろう。都会暮らしに慣れてしまうと、幼いころ仲良しだった蛙とはすっかり御無沙汰になってしまった。でも、蛙が鳴くのを聞くと、すごく懐かしい気持ちになる。そう、蛙と田圃は日本の原風景なのだ。ところが、この歌は十九世紀のドイツで愛唱された「カエルの歌」なのだそうだ。知らなかったなあ、驚いたなあ。

声明のわたる古刹や花万朶　　井上玲子

薄暗いお寺の奥から、お坊様の唱える声明が厳かに聞こえてくる。声明は黒光りするまでに拭き清められた廊下を伝い、本堂の高い天井に届くように流れていく。近くの宿から、朝の散歩を兼ねてお寺を訪ねた私は、春爛漫の桜が咲き誇る境内に立ち尽くし、花吹雪と厳かな声明に包まれ、千古の時を超越する古刹のたたずまいに呆然としている。

田の水の淀んでをりぬ目借時　　飛永　鼓

季節は日を追うごとに暖かくなってきた。家を出て七、八分も歩くと、広々とした田圃に出る。田圃にはすでに人が出ていて、一心に農作業をしている。先ごろ植えたばかりの稲が吹く風にそよぎ、根元の土が柔らかなせいだろうか、水が淀んで見える。遠近から賑やかな蛙の声が聞こえてくる。畔道に立って田圃を眺めていると、なんとなく体ごと引き込まれそうな、そして眠くなるような、何とも不思議な感じがしてくる。

白椿落ちてしつかり開きけり　　中野　彊

真っ赤な椿はもちろんだが、純白で大輪の椿の花にはまたとない気品がある。毎朝の散歩で生け垣の前を通ると、なぜか清々しい気分になるほどだ。椿は花びらを散らさない。丸ごとぽとりと落ちる。それが嫌だと言う人もいる。ある朝、その白椿の花も枝を離れ、地上に落下した。それでも、花は崩れてしまうことなく、しっかり開いたまま、中心には鮮やかな黄色の花粉が輝いていた。

古草を踏んで少年逆上がり　　下川光子

すっかり春らしくなって、あたり一面に若草が萌え広がっている。小学校の下級生だった少年は、四月から上級生になった。弱々しかった腕には筋肉が付き、体全体が男の子らしく逞しくなってきた。体育の時間、ちょっと怖くて苦手だった鉄棒の逆上がり、いま校庭では誰も見ていないので、鉄棒をつかみ、足下の黄ばんだ古草を思い切り蹴ってグルっと回った。逆上がり成功だ。

季音雪

時の日

星野和葉

時の日や賞味期限と消費期限
時の日の特別は無し時短営業
時の日や当てにならぬは腹時計
父の日や「光」墨書の酒届く
父の日や夫の好物あれこれと

立つ

茂木和子

南天の花累代の長屋門
にはたづみ雲を映すや花南天
南天の小花に力直に立つ
青すだれ風の立ちたる母の部屋
青すだれ爪剪つてゐる小昼刻

紫陽花　矢作水尾

僧三代の揃ひし古刹濃紫陽花
あぢさゐの家よりピアノ雨上る
一山の四葩華やぎ溺れけり
海中へ禊ぎいくたび荒神輿
野の色を裏返しゆく青嵐

あぢさゐ　山中みどり

梅雨の川「トランペットラブレター」韻々と
はかどらぬ会議ミントのアイスティー
あぢさゐや柾目の細き母の下駄
色褪せしあぢさゐを切る花鋏
塩で揉む瓜のかをりや梅雨の星

化身　柚木治子

信心や梅雨の祠の半開き
化身とは知らで邪険にせし白蛾
太公望沼荒れ狂ふ青嵐
幽かなる母乳の匂ひ今年竹
若竹を四隅に立つる神事かな

黒南風　由良ゆら女

黒南風の抱きこぼしたる港の灯
楽なびく雲中菩薩山法師
漬梅の蔕を取りつつ母のこと
短夜や寝息うかがふナースの灯
女湯に「男」ののれん明早し

真夏の杭　吉住光弥

小川(かは)貧し白鷺残す助走の白
心技体充つかはせみの漁(すな)どれる
着付け終へ舞妓が分くる青すだれ
含(ふふ)む口おばこの顔もさくらんぼ
老いの身に真夏の杭や待つワクチン

ワザ。ワザ　網野月を

雨降れば好日といふ桜桃忌
愛人に去られ腕を蚊に吸はす
血を分けた兄弟分の蚊を逃がす
モンブランの青黒にじむ桜桃忌
桜桃忌第三巻が見当たらず

草むしり　石井喜恵

梅雨寒や窓なき部屋で読む乱歩
梅雨曇つひに動かぬハシビロコウ
梅雨晴間踏切さつと開きたり
梅雨晴や窓全開にコーラス部
全校の生徒六人草むしり

己　顔　石山かつ子

まくなぎを操る森の吐息かな
蜥蜴の子己顔して葉表に
めたたきと共に銅山覗き込む
その中の品よく美しき踊笠
見番の女将の脇の招き猫

ほととぎす　大橋廸代

薄明の夜具にひそめる火取虫
金輪際打たぬワクチン香薷散
神泉やすくと闘ふあめんぼう
このところ転んでばかり天魚(あまご)釣り
将軍塚へ喘ぐ近径ほととぎす

舟芝居　大村節代

梅落とす和尚口だけ指図だけ
簗番や水に獣の影法師
島の子はペコちやん顔し麦の笛
麦笛や風に唄あり匂ひあり
舟芝居末席に座し口ぱくす

魅惑の夜　小倉倭子

夕蛍甘い誘ひに惑はさる
魅惑の夜椿山荘へ蛍狩
蛍火の川岸沿ひに小舟ゆく
めまとひをめくらめつぽふ追ひ払ふ
まくなぎを払ひて憂さを解消す

西日暮里界隈　栢尾さく子

青時雨真昼の月見坂登る
降り立ちて崖滴りの初音町
結び葉のとけたる辺り地蔵坂
山門に砲弾のあと甲虫
道灌草見て芋坂の団子買ふ

蛍火　菊池ひろこ

蛍火や水の流れに迷ひあり
親族の寝息満ちゆく蛍籠
青梅雨や風呂火漏れゐる外竈
空梅雨の芝で蹴上ぐる毬が欲し
井戸釣瓶上下し鳴かす閑古鳥

風青し　五明昇

若葉風甍まぶしき結願寺
白鷺の日暮を延ばす散居村
旅そぞろ川辺の宿に脱ぐ薄暑
青嵐たてがみ立つる尾根の径
故郷や卒塔婆鳴らす青嵐

テレピン匂ふ　境延昭

裸婦像のテレピン匂ふ夕薄暑
はじき豆八十路にもある反抗期
まくなぎや男が弱音吐く小路
めまとひや見ぬふりをする痴話喧嘩
品書は女将の小筆鱧の皮

江戸地図　椎野美代子

唐三彩の馬が出窓に薄暑光
夕薄暑泣くによからむ外階段
待たざるる知らで待ちをり夕薄暑
古書店の立読む背なや街薄暑
江戸地図の海を歩いてゐて薄暑

青田風　島津初花

花菖蒲栄華を偲ぶ常高寺
ゆすらうめ宝石の艶放ちをり
栗の花少しざわつき雨となる
びは熟れて昔はどこも大家族
墳丘に佇てば青田に風生まる

河鹿鳴く　鈴木康世

結界の風の吹き来る白紫陽花
山内は羅漢浄土や濃紫陽花
隠沼の澱をはぬるや梅雨鯰
とつぷりと暮れし裏山青葉木菟
枕辺を統ぶる瀬音と鳴く河鹿

浮灯台　田寺玲子

老鶯や木霊のあそぶ神の杜
稲荷祀る郭跡なる五月闇
黒南風や浮灯台の定まらず
短夜のアレクサに聞く明日の空
銃眼の三角四角梅雨晴間

夏のれん　十倉和子

夏蝶の乱舞いつとき地を揺らす
北斎の涛の構図や夏のれん
夏のれん黒地に白抜き酒どころ
うきうきと湯屋のこぼれ灯街薄暑
忌に集ふおはぐろとんぼみな喪服

身ほとり　永野史代

上り簗かけ坂東太郎悠悠と
簗打つて男さみしき夜の峡
透けし胸ためらひつ着る更衣
帰らぬ人を待つ身ほとりに梅雨の蝶
灯台の下僕となりぬ昼顔は

梅雨　西山貴美子

降りかかる病葉ひとつ汝が傘に
相聞のごと浮き沈む梅雨の蝶
梅雨の蝶即かず離れず去りゆけり
梅雨晴間ワクチン接種待つ間にも
水性インクも猫も蒸発朝曇

夏の蝶　波多野寿子

窓あけて川の音聞く梅雨の入り
兵法は絵図に残りぬ夏の蝶
ラベンダー少女すらりと門に入る
夏川の白い小石をまぶしめり
風青し御手つなぎし道祖神

☆　☆

季音月

七色帽子　森本早苗

海峡に七色帽子虹の立つ
国生みの島に片足虹立てり
黙浴の露天一転ほととぎす
紫陽花や太閤湯殿桐の紋
忍冬の美しく匂ひぬ夜の卓

能管　丸山マスミ

能管の音が闇開く薪能
洗ひ牛瀬音に流す野の疲れ
薄暑光花嫁放るブーケにも
水切り石走る川面や薄暑光
簗守の爺を慕ひて瀬に立つ子

冷奴　原田想子

若狭路の今日も雨呼ぶ濃紫陽花
傷のある実梅も売りて道の駅
無造作に地球儀廻す梅雨晴間
海外へ旅せずに老い緑陰に
吾が至福冷奴にてふはり酔ふ

たまゆら　森川義子

たまゆらの色を尽くして濃紫陽花
枯山水の石に品よき苔の花
工房の窯の余熱や風薫る
梅雨晴間鳩が水飲む潦
網打ちの男立ちさる沈下橋

薄暑光　大場順子

一馬身抜きしたてがみ薄暑光
しろがねのイルカに触るる薄暑光
皮脱ぎし秘色の素肌今年竹
手習ひの窓に影置く今年竹
遥かなる山が近づく梅雨晴間

紫陽花　山田美佐尾

砂に書く君の名前を夏の海
走り梅雨戸板一枚露天商
めまとひやお前も本が好きなのか
夏蝶や品川宿に遊女塚
京町家裏庭に咲く七変化

赫き　鳥羽和風

込み合うて赫(かがや)き合うてさくらんぼ
源五郎農一筋の生き字引
草取の鉤で輪を書くけんけんぱ
青田今波の形に風渉る
前世は毛虫此の世紋付羽織る身ぞ

猫の巨体　池田雅夫

雲海を渡りゆきしは龍神か
川下る和舟のしぶき虹間近
夕立のあとや青空知らん顔
地に垂るる番犬の舌日の盛り
膝に乗る猫の巨体や縁涼み

麦の秋　松宮保人

巣立鳥七堂伽藍越えて行く
難題を解きて互の新茶汲む
神苑の多種草木や風薫る
黄熟の其処だけ不思議麦の秋
烈風や松に毛虫のたぢろがず

花菖蒲　宇田白鷺

冷蔵庫節電ランプの灯りけり
青梅や真白き雲の流れゆく
仏壇に供へ新茶のなほ薫る
この星に生きのびてゐる源五郎
放哉の句碑になびける花菖蒲

風のリレー　藤澤喜久

父の日や分校を出る老教師
詰襟を脱ぐ少年の今年竹
万緑や風漕ぐ少年の銀車輪
心まで裸足で遊ぶこそばゆし
街路樹の風のリレーや夏来たる

薄暑光　高島寛治

薄暑断つ天井高き大本堂
薄暑光柏手少しくぐもれり
ゆるやかに和服着こなす蛍の夜
若竹や生気溢るるチアガール
蛾の群れて騒ぎの野外コンサート

暑気中り　井上燈女

熟れるまで西瓜の上に隠し藁
建売を植田に写す田の広さ
相席の話小声に句の談議
娘の炊いた粥ふつくらと暑気中り
電柱へ大蛾の止まるけだるさや

あぢさゐ　渡辺舎人

女生徒のなんでも本気濃紫陽花
扇風機出す風を弍から組み立てる
わたしだつてをんなですわよ衣更
合宿の大蚊帳同床に死するごと
へばりつく児を剥がしやる花火の夜

堂鳩　町野広子

青梅や軒に鎮座の陶狸
工場の音止む正午梅青し
朴ひらき堂鳩好む木陰あり
簗を組む祖父直伝の器用な手
憧れの兄に教はり簗を組む

著莪あかり　荒井倶子

青嵐鳩の着地を狂はせる
はじき豆琥珀色した酒を愛づ
酒少し月下美人をお相手に
羅や真砂女のやうに生くもよし
菩提寺に水子地蔵や著莪あかり

夏来る　井関礼子

籠り居て子の手土産の夏蕨
山菜の夏野の香り存分に
紫陽花の彩染めしより雨を恋ひ
ひと頃の日曜菜園茄子の花
青嵐や峡に半生住み旧るも

指鉄砲　川崎道子

木下闇行者の列をやりすごす
黒南風や湿る纜放り投ぐ
梅雨ぐもり手持無沙汰な休刊日
解体のせまる山門梅雨夕焼
黙考の植田の鷺に指鉄砲

入れ歯　霜中冬至

他意もなくぶち当つて来る源五郎
親の名を問うてもみたき源五郎
冷蔵庫大なり小なり置きどころ
道よぎる毛虫のスピードいとほしむ
入れ歯してまだ噛み合はぬ麦の秋

銀の爪　内田恵子

朝の卓クロワッサンとさくらんぼ
街薄暑銀色に塗る足の爪
ゆうらりとボートは空に漕ぎ出しぬ
だうだうと代返する子青嵐
夏の月白光はじむ神の杜

薄暑　岡野順子

この葉つぱてらてら光りゐる薄暑
踏切のきんこんかんと鳴り薄暑
薄暑かな足の裏には庭の土
薄暑かな静かに歩む螺旋階
道路工事の模様替へられ薄暑

天体ショー　伊藤敦子

夏の夜や皆既月食天体ショー
葉ざくらの木洩れ日匂ひ濃くなれり
葉ざくらに爆ぜているのは赤ん坊
日輪の昇れば動き薔薇の花
あぢさゐの渓に溺れて鰓呼吸

青尽くす　梅澤佐江

青尽くすあぢさゐ多(さは)に古都の寺
鶴頸に十薬の白極まれり
蛍籠秘すべき恋の無くもなし
金輪際寡婦を貫き草を引く
まくなぎの一途な恋にまみれけり

梅雨の候　松井由紀子

歌ひ出すやうに解ける月見草
翡翠とぶアニメの剣士美少年
ワクチンの光る針先走り梅雨
梅雨の雷手櫛で捌く束ね髪
洞門の先に陽のある梅雨山道

雨止まず　井口俊晴

紫陽花のクスクス笑ひ雨止まず
梅の実の産毛濡らして朝の雨
怯むまい仔犬が挑む青嵐
蛍舞ふこの夜に賭けし娘追ふ
いい風ね母が呟く青簾

栗の花　上戸千津子

想像も付かぬ一つや栗の花
梅雨寒や透き通りゆく鐘の音
里の川飛沫は小さき虹をなし
山中の道しるべとや滝の音
時の日の巡り巡りて年深し

柿若葉　西浦千枝子

茅葺きの庭に新車や柿若葉
波をうつ植田に鷺の思案顔
祈祷師の庭に真白の四葩かな
手の甲の覚えなき傷夏薊
幼児等鼻をつまみて栗の花

柿の葉寿司　野口和子

父の日の柿の葉寿司をお相伴
蛇出でて高くかざすや竹箒
知らぬ人馴染の人も溝浚ひ
解体の明治の旅籠街薄暑
草むしりペットボトルをラッパ飲み

青簾　松山清子

鱧を食ぶとぎれとぎれの遠太鼓
五月雨や行き交ふ傘のかしげ合ひ
南吹く駅アナウンス声われて
青簾諍ふときも京言葉
釣堀や釣果覗きて叱られて

季音花

梅雨の月　井上玲子

寂寞と喪の家つつむ梅雨の月
梅雨の月窓に引き寄せ鎮魂歌
和らかに喪の庭つつむ白紫陽花
小流れの水照りに映ゆる濃紫陽花
夕映えやささ波寄する植田の面

蛍　田中章嘉

夏木立靡けば望む穂高岳
夏草の中匍匐兵士の汚れ顔
何時の間に肩に一匹蛍かな
水鏡蛍は化粧すませたか
薄命の蛍の中にイみて

わが小径パートI　河野はるみ

武蔵野を被ひつくすや梅雨曇
紫陽花の日増し色益すわが小径
径塞ぎ「ゆつくり観よ」と七変化
畦道を裾ひらめかせ初蛍
雨あがり蛍の帯の七重八重

三分間　正木萬蝶

カップ麺の三分長しかたつむり
赤門薄暑歩幅の広き理系女子
お屋敷の玻璃の歪みや薄暑光
深読みの手紙の余白青嵐
閨怨（けいえん）の浅き眠りやほたる降る

上高地　近藤徹平

夏めくやホルンの響く上高地
夏来る富士五合目のハイヒール
品格は問はぬ浮世絵夏季講座
夏めくや十トンダンプ繰る女
蟻蠓やいのち幾万からむ土手

月見草　大塚茂子

庭石や愚直の兄と月見草
狛犬をなづる風あり月見草
梅雨冷や女の決意東慶寺
鳥よりも早起きの夫草をとる
大輪の菖蒲の白のひるがへる

青梅　飛永鼓

祖母が居て母居て八十八夜かな
桐の花一日たつぷり働きぬ
卯の花の雨に媚びたる白さかな
俎板の鰹に土佐の海を見る
梅もぐや一日緑と風の中

青嵐　熊倉千重子

矢を放つ鞍の少年青嵐
カーブミラーにうねり溢れて青嵐
鉄線花きりきりしやんと若女将
ワクチン予約容易に取れず走り梅雨
父の日や越後の酒を仏にも

夏の草　宮﨑チアキ

皆既月食待つも無粋に梅雨の空
見渡せば青葉の波や歩道橋
剥き出しの上昇志向夏の草
草引けば生臭き香の漂へり
背筋を伸ばすダンスシューズよ夏の夜

白牡丹　石田慶子

廃屋となりし生家に舞ふ蛍
形見分け伯母の好みの藍浴衣
昼顔とあくびの彼のツーショット
路地奥に住まふ恩師の白牡丹
娘四人父の落胆桐の花

薄暑　下川光子

翡翠の水面を青き風の起つ
なまこ壁尽きて魚の香薄暑光
夕薄暑外灯うるむ京の路地
衣更ふ心もとなき手と足と
青梅雨や蔵はおしやれなカフェテラス

夏帯　野平美紗子

綴織の夏帯を出す桐箪笥
お稽古に母の遺せし夏帯を
母の遺愛の夏帯を締め踊りの輪
尺蠖に大黒柱の尺取らる
盲導犬乗りきて梅雨のバス発車

大蛇　福田千春

掌にとまる蛍よ妹か
点滅は合図か蛍「もういいよ」
昼顔のはな朽舟を飾りけり
寄り添ひて咲く昼顔よ無縁墓
つながらぬ電話大蛇は身を隠し

蛍　菅原知子

貝ボタン二つ外して薄暑かな
遠き日の隊長は姉蛍狩
田舎ぐらし蛍のために戸は開けて
夏帯の深海色は母のもの
つんつるてん吾子の成長更衣

万緑　後藤綾子

雲の峰ブルーベリーの育つ山
浜かける馬上の少年雲の峰
万緑や玉砂利進む禰宜の列
万緑の底にガラスの音楽室
ビル街に大きな天幕蛍狩

夏帽子　中野彊

奥深き公園の門濃あぢさゐ
紫陽花の愁の順に藍ぞ濃し
姿勢よく歩こう黒の夏帽子
青梅の八百屋の棚に整列す
万緑の中の小さきパイの店

草笛　宮崎紫水

自転車の轍の響き梅雨に入る
何事もなき一日や冷奴
登校の声はつらつと梅青し
子燕はじやれつつ飛べり雨上がる
亡き父の草笛の音に追ひ付けず

行きずり　野田静香

行きずりの君に似し人青嵐
吊橋に遊ばれてをり風青し
蟻の列外れしものへ草の蔭
鈴蘭や初恋の文詩集から
羅の人囁きぬ桟敷席

芒種の夜　日高道を

学舎に芒種の雨の降るばかり
草深き老舗旅館の鉄線花
極上のワインを選ぶ芒種の夜
雨垂れの変はらぬリズム梅雨の夜
ナンプレに嵌るをんなや油照

若葉　青木鶴城

葉桜や優しさ力強さへと
締込みの尻の躍動三社祭
上り鮎喧嘩つ早さは親譲り
貝のよに口をつぐんで潮干狩
退院を訊ぬる朝や窓若葉

白あぢさゐ　石川理恵

尺蠖の前屈上手伸び上手
屋上は告白の場所青嵐
短夜やモノクロ映画早口で
いよよ長き少女らの脚更衣
暮れさうで暮れぬ一隅白あぢさゐ

夏至　葛城千世子

夏茸ゴルフ練習出来さうな
校庭の竹馬の子ら夏至の昼
向日葵やたぎる思ひを抑へをり
野良二匹玄関先の大昼寝
朝一番のワクチン接種梅雨の晴

美人顔　川島典虎

夏の原どこかで水の音がする
高校野球見るものやるもの団結し
炎天を誰かと見れば我が息子
二三日見ぬ間に変はる七変化
夏野に夢中花束抱へ美人顔

今年竹　佐々木典子

風ごとに葉を咲かせゆく今年竹
今年竹故郷思ひ母思ふ
若竹の巻葉ほぐれて清々し
いちはやく吹く風かはる植田かな
山々のみどりあざやか雨あがる

更衣　瀬戸雄二郎

外出はしませんされど更衣
更衣お済みですかと洗濯屋
更衣済ませたばかり喪服かな
女房より二週遅れて更衣
更衣二の腕眩しナース室

☆

☆

句集 恒心（こうしん） 大串章

滝音に目を閉ぢ滝を膨らます

俳人協会会長で、「百鳥」主宰である著者の第8句集。平成27年から令和2年までの392句を収録した6年ぶりの新句集、満を持しての刊行。

第8句集

定価2970円（10%税込）
四六判／上製／220頁
ISBN：978-4-04-884435-2

KADOKAWA
発行：角川文化振興財団　発売：株式会社KADOKAWA
●〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ●TEL.KADOKAWA購入窓口 0570-002-008

お 詫 び

「水明」７月号 29 ページの【『水明誌』を繙く】の執筆者名が、大石雄鬼氏になっておりましたが、本誌発送の後に、正しい執筆者が寺澤一雄氏であることが判明いたしました。

これは大変重大なミスであり、早速原因を調査しました結果、当結社内における組織間の連絡不徹底によって発生したものであることが判明いたしました。

この度の過失によって、寺澤一雄様、大石雄鬼様に多大なご迷惑をお掛けしましたことを先ずもって深くお詫び申し上げ、また、水明誌をお読みいただいている外部の皆様、そして、水明俳句会会員の皆さんに発行責任者としてお詫び申し上げます。

当然のことながら、今後はこのような問題を発生させぬように充分な防止策を講じましたことをご報告いたします。

[追記]本号に、７月号の記事を、正しい執筆者名で再掲載いたしましたので、改めてお読みくださるようお願い申し上げます。

令和３年８月１日

水明俳句会 主宰　山本鬼之介

2022 年現代俳句カレンダーの予告

毎年､当会会員の皆様に購入していただいております「現代俳句カレンダー」2022 年版の製作が進んでいます。

当会から、主宰・網野月を・大村節代・石山かつ子・大橋廸代・椎野美代子・星野和葉の７名の俳句作品（主宰は短冊揮毫）が掲載されます。

「水明」９月号から販売のご案内を掲載しますので、多くの会員諸氏にお買い上げいただくようお願いいたします。

令和３年８月１日　水明俳句会

主宰　山本鬼之介・総務部長　日 髙 道 を

『水明誌』を繙く（水明五月号）

寺澤一雄（『鏡』主宰）

舶来のワクチンを待つ山椒の芽（七頁）　茂木和子

コロナ禍も既に一年半が過ぎた。句会の会場が閉鎖されたり、閉鎖されなくても三密を避けるために人が集まる句会ができなくなってしまった。緊急事態宣言が解除されると自粛要請が緩くなり、句会場も開かれたので、早速句会を開いたりした。しかし昼間は良いが夜間はお貸しできないという会場もあった。バーでやっている句会は時間を短縮したりして行うこともできたが、酒類の提供ができなくなると店が閉店してしまった。それでもインターネットや手紙を使って擬似句会を開いて楽しんで来たが、それも最近飽きてきた。というのも句会は人と会うのが醍醐味であり、句会の後は酒を飲んでくだを巻くのが楽しいのである。

コロナ禍が始まった頃、識者はワクチンはあと二、三年しないと実用化しないなどと言っていたが、それはあくまで日本のことだったのである。昨年末には海外でワクチンが実用化され国によっては素早い対応で接種が進んだ。日本は自国のワクチン開発ができず、海外から素早く持ってくることもできず、結局接種が始まったのは四月ごろである。掲句では「輸入ワクチン」とは言わず「舶来のワクチン」と書いて、ワクチンに対する渇望感がよく出ている。「山椒の芽」は日本料理には欠かせぬ存在であり、ワクチンの必要性を大いに思わせる季語である。

ディスタンス・エヴィデンスとや黄砂ふる（一六頁）　菊池ひろこ

これもコロナ禍の一句。ディスタンスは距離。コロナの感染防止策としてソーシャルディスタンスとかフィジカルディスタンスのように使われた。社会的距離とか身体的距離を保つと言う意味である。その距離は二メートルくらいだ。

エヴィデンスの意味は「証拠」とか「根拠」。ソーシャルディスタンスと違い昔からエヴィデンスは使われてきたが、コロナ禍では「〇〇治療がコロナには効果的であるエヴィデンス」、「ワクチンが効果的であるエヴィデンス」と言った使われ方をして、コロナと関連してこの言葉もよく耳にする。

『とや』は伝聞あるいは不確実な内容を表している。作者はディスタンスとエヴィデンスを不確実なものと捉えているのである。「ディスタンス・エヴィデンス」と並べて書かれると、その調子の良さも相まって、本来ならばコロナ禍でとても大切なものである「距離」と「証拠」を薄ぺらなものに落としている。

黄砂が降ると視界が悪くなり、車が汚れたり洗濯物も外干しができなくなる。俳句では重宝されてきた季語であるが、黄砂は実体のある嫌なものである。この句では「黄砂ふる」が「ディスタンス・エヴィデンス」をディスる方向に働いている。コロナ禍で胡散臭いものがいろいろと見えてきたが、胡散臭さをうまく捉えた句である。

『水明誌』を繙く（水明六月号）

寺澤一雄（『鏡』主宰）

告天子地球すつぽりCO2（一四頁）　由良ゆら女

CO2とは二酸化炭素のこと。炭酸水とか発泡酒から出てくる泡である。「CO2に地球がすっぽりと包み込まれている。」と「告天子」が叫んでいるかのようだ。「告天子」は「こうてんし」とも「こくてんし」とも読み、雲雀のことである。雲雀と書かずに告天子と書いたことで、雲雀が天の声が発しているように思える。

正確には地球はCO2に覆われているわけではない。現在のCO2濃度は0.41％を超えて産業革命以前の1.5倍程度になっているが、大気中の酸素濃度は21％、窒素濃度は78％であり、数字だけ見ていると二酸化炭素に地球が覆われているようには感じられない。しかしながら増加した二酸化炭素濃度の影響で気温が上昇し、氷河が溶け出し、海面が上昇している。激しい氷河の後退は実際に見ることができ、南洋の小さな島では海面上昇により、生活に影響が及んでいることがニュースなどで取り上げられているので、現象自体は否定できないが、それがCO2の影響だということは認めない人も多い。温暖化は地球全体に影響を及ぼしており、こんな僅かな濃度だがCO2が地球をすっぽり包んでいるように感じてしまう。

雲雀が人類に警告を発しているのに、人間はなんと鈍感な生き物なのであろうか。

雉鳴くやソーラーパネルのその下で（二四頁）　野口和子

先日、緊急事態宣言中だったが電車で草津温泉へ遊びに行ってきた。電車の車窓からソーラーパネルを何度も見かけた。メガソーラーほど大きくはないが、それなりの大きさの土地にパネルを設置して発電を行っていた。個人の家の屋根にも設置されているパネルの多さにも驚いた。

そもそもソーラーパネルがこれほど普及したのは、太陽光や風力を利用して作られた電気を再生産可能エネルギーとして、化石燃料を燃やして作った電気よりも高く買い取っているからである。これは化石燃料の使用量を減らして、二酸化炭素を増やさないようにして、地球温暖化を抑えるための施策である。

ソーラーパネルは光を通すために、その下で農作物の栽培も行うことができる。作物が育つと言うことは雑草も生えるのであり、草が生えて雉にとっては過ごしやすい環境になっているのでは。ただし除草は保守管理上重要である。

ソーラーパネルが設置される場所はもともと雉がいるようなところで、季節になると草むらで雉が鳴いていたが、最近ではソーラーパネルの下で雉が鳴き出したのである。

ソーラーパネルが地球を温暖化から守るのみでなく、雉に棲家を提供していることで、人類は少しは良いこともしているかも。

現代俳句鑑賞

網野月を

抱擁も握手もなくて木下闇　安西　篤

（『俳句四季』6月号・巻頭句より）

今のご時世を背景に読めば、むろん三密を避けるためとも解せるのであるが、コロナ禍がなければ、むしろ怖い話になる。いや無表情な話になってしまう。中七の「……て」が木下闇を導き出している。時事句として解した方が穏当な気がする。

恋猫の己の傷に触れさせず　伊藤昌子

（『俳句四季』6月号・ノクターンより）

上五の季語「恋猫の」は中七に繋がって解釈することが出来る。とすれば恋猫の負った向こう傷ということになるのであるが、「恋猫の」の「の」が半分切れている効果を誘引しているとすれば、中七座五は作者のこととして解釈できるかも知れない。

他に「桜蕊降る着信のノクターン」がある。

口といふ歪な楽器水温む　今井　聖

（『俳句』6月号・苜蓿より）

歌を歌っているのだろうか。「楽器」というのだから口笛ではないかと筆者は考えている。「歪な」とあるのは口の形を言い当てているのだが、口笛で奏でるメロディーもいささか調子外れのようである。座五の季語「水温む」がその調子外れの口笛を許容する雰囲気を醸し出している。

他に「「黄砂来よる」と担任の声色で」がある。

月涼し庫裡の魚板は口を開け　花谷　清

（『俳句』6月号・蛇の衣より）

精密機械のような、つまり高級時計のような句である。句中のアイテム「月」「庫裡」「魚板」「口」のコンビネーションが絶妙である。アイテム同士の遠いものと近いものの配分が均衡の内に設計されている。彫り物であるから常に開いている「魚板」の「口」が、動作の中に在って、いま将に口を開いたように読める。

夏暁や浪の調べに透くる耳朶　佐藤映二

（『俳句界』6月号・九十九里涼しより）

何とも清々し句である。上五の「……や」切れに座五の名詞止という俳句における王道の構図である。その構図の中に

「浪の調べ」という九十九里の景が詠み込まれ、また「透くる」という作者の心理が吐露されている。句の型を十二分に活かしきっている句である。

他に「パラグライダーの帆を抱き九十九里涼し」がある。

碑の無事是貴人新樹光　田村和彦

（『俳句界』6月号・無事是貴人より）

「是」の読解は、呈示した語句を再度述べ立てる、のに使用した「是」であろうと解釈した。それでも「貴人」とはどういうことなのか。筆者は碑文に刻まれている事柄が、「貴人」の事事を記録していると解釈しました。座五の季語「新樹光」がいにしえの出来事を現代に蘇らせて、且つめでているように読みたい。

揚雲雀大草原を統べりけり　太田土男

（『俳壇』6月号・二度山より）

座五の動詞「統べり」がすべてを物語っている。上五の季語「揚雲雀」の垂直的な把握と、中七の「大草原」の平面的な把握が句の立体的な空間を構成している。見えてくる景の何と広大なことか。「統べりけり」と丁寧に述べたところが格調の高さをも付与している。

他に「二度山の牛のひと鳴き牧びらき」がある。

鳥帰る両の翼のある限り　松浦加古

（『俳壇』6月号・探梅より）

無論のこと実景なのであろう。であるが、中七座五の「両の翼のある限り」には作者の決意というか決心にも似た気迫が感じられる。実景であろうから、もちろん作者は帰る鳥にその決意を見てとったのであろう。「翼」であるから、上五の季語「鳥帰る」との関係性を有しているのだが、作者自身の態としても読解できるのではないだろうか。

青柳や露坐の仏の面やつれ　丹羽真一

（句誌『樹』6月号・晩春より）

露坐仏は肥ったり痩せたりするわけではなく、長年の露に曝されて、すっかり時代が付いたようなのである。座五の「面やつれ」はその景を叙している。もしかしたら作者の心象が投影されているのかも知れない。上五の季語の「青柳」の斡旋が職人芸なのである。

マリア月やはり犯人あの人か　石口りんご

（句誌『鷗座』6月号・早う来いより）

「マリア」と真「犯人」の取り合わせに新味がある。キリスト教の伝書にはユダをはじめとして、「犯」という文字が当たる人物が多く登場するようだ。「聖五月」「聖母月」という季語が示しているように、本来ならばポジティヴに解したい「マリア月」という季語であるから、二時間ドラマのテレビ番組を想像するか、もしくは推理小説を読んでいるくらいが調度よいかも知れない。深読みのできる作句でもあり、そこのところがちょっと怖いのである。

自選二十句

仲田利子

初午や雨豊穣を祈りゐる

草萌ゆる唐津の丘の古代窯

春浅し案内尼僧の青き頭

春雷や慈雨待ちあぐむ山の木々

薫風や繙く最新版の辞書

風涼し円空仏の鑿の跡

サングラスバッグにひめて一人旅

夕端居母の姿を目の隅に

袖通す母の着物の衣魚の痕

蛍火や病む弟の命とも

谷川の瀞に影おく夏の雲

草原にオカリナ響く星月夜

モーツアルト聞きて葡萄は甘くなり

秋の暮三尸の虫の蠢けり

枯蓮活けて花展の華となる

五弦琵琶の音色乗せたき小春風

時雨るるや鉱山跡の異人館

西行の吉野の三年虎落笛

黒部路の狭き空より霙来る

水槽の翻車魚ゆつたり十二月

新珠賞受賞者ノオト ――――〈仲田利子〉

更なる挑戦を

染谷正信

新珠賞受賞、おめでとうございます。水明に入会されて三年目での受賞は快挙であり、日頃の弛まぬ努力の結実と思います。

利子さんは、令和元年六月、当時の大宮読売俳句教室（現りんどう俳句会）に入会されました。入会初日に、「今まで指導者のいない地域の同好会で俳句を楽しんでいましたが、先生についてしっかり学びたいと思い入会しました。」と挨拶されたことを記憶しています。控え目な、淑やかな方と言う印象がありました。当時の読売俳句教室の指導者は、運営幹事長（当時）の山中順子先生でした。先生の指導は大変厳しく、デッサンの甘さや、テニヲハの使い方について、舌鋒鋭く批判し、問題点を的確に指摘し、指導されておりました。

利子さんの入会二回目の句会のことです。

蛍火や病む弟の命とも

と言う句があり、蛍と命では少し付き過ぎかと思いましたが、大変重いテーマをさりげなく詠んだ内容に心を惹かれ、私の六句選の中で特選に頂きました。披講の際、利子さんが名告りました。句会後にお伺いしたところ、弟さんが現在入院中で、今の自分の気持を其の儘詠んだとのことでした。弟さんの回復を願うお姉さんのやさしさと愛情が滲み出た句であり、作者の本心を素直に表現した句に感銘を受けた記憶があります。

入会三回目には、早くも、

サングラスバックにひめて一人旅

を出し、美事に順子先生の特選を取りました。

以後は、毎回特選に入るようになり、入会三か月でめざましい進歩を遂げられました。もともとの素質が、順子先生の厳しい指導により、大きく開花したものと思います。

次の五句は、入会した年の句です。

草原にオカリナ響く星月夜
鮎落ちて喧騒暫し山湯宿
恙なき友の手作り干柿来
秋祭友らと交はす国訛
吊橋を揺らし紅葉の客となる

いずれも、入会半年間の作品とは思えぬ、句形、句意ともに堂々とした作品です。特に最初の句は、羊飼の少年が澄みきった星月夜の下でオカリナを吹いている情景を思わせ、異国的な雰囲気を醸し出す良句と思います。

次の五句は、水明令和二年十月号「新同人紹介欄」に掲載された利子さんの自選句です。

草萌ゆる唐津の丘の古代窯
薫風や繙く最新版の辞書
風涼し円空仏の鑿の跡
五弦琵琶の音色乗せたき小春風
枯蓮活けて花展の華となる

古代史の薫りのする句が多い。利子さんにお尋ねしたところ、奈良に所在する大学の通信教育部に在籍し、古代史を学んでいるとのこと。スクーリングの実地調査がなりよりの楽しみとのことでした。お孫さんと同年代の学生と肩を並べて勉学に勤しむそのお姿と情熱には、全く頭の下がる思いが致します。

右の句には、その片鱗が随所に伺えます。二句目の「最新版の辞書」とはどんな辞書だろうか。大変興味が引かれます。万葉集を読むための、上代語が詳しく説明されている、かなりレベルの高い辞書と推測しています。

又、最近では、水明令和三年四月号に、「『水明』を繙く」の題で「梟」同人・「窓」代表の原雅子氏の文章が掲載されています。その中で雪欄作家の田寺玲子氏の作品と並んで利子さんの作品、

時雨るるや鉱山跡の異人館

が取上げられ、丁寧な鑑賞がなされています。俳句を始めて二年余りの人のものとは思えぬ作品です。この句については、原氏の鑑賞文が言い尽していると思います。皆様に四月号二十八ページの再読をお勧めいたします。

今回の受賞対象句十五作品のうち、私が特に好きな句は、

春の雪山中に建つ津波の碑
薄氷を足裏で拾ひ筑波山
山峡の棚田の底に秋入日
陵や幾星霜の秋の風
こけし描く翁の眼確か雪五尺

です。いずれも山と旅の好きな利子さんが旅先での実景実情を詠んだ句です。俳句は中七が大事と言われますが、どの句も正確なデッサンと語法により、作者の主題が十分に読み手に伝わる出来栄えと思います。

おめでとう、利子さん。今後も天性の知識欲と冒険心とを発条に、更なる挑戦を続けられ、水明を代表する俳人になられることを切に願っております。

自選二十句

本橋稀香

熱き茶を啜る棟梁春浅し

鳥帰る胎内羅針盤信じ

鶯や字の名知らぬ人ばかり

冴返る点字ブロック探る杖

春の雨巡り遊ぶや鎖樋

取り合ひの如雨露一つやチューリップ

休校の雲梯に散る桜蘂

バスを待つ私だけの残花かな

生まれざる命点点蝌蚪の紐

朝粥や乱反射せる柿若葉

子を叱る声筒抜けに朝曇

湯上がりの子等は裸族や天瓜粉

白百合の玲瓏として教会堂

振り向きて吾を値踏みの蜥蜴かな

もう一つ鰯雲あるガラスビル

欄干のこの朱が好き赤蜻蛉

桜紅葉なべて虫喰ひ江戸小紋

束ねても何故か寂しき草の花

始発待つ列の寡黙や息白し

遠目には金の日溜り枯芝生

隠れた貴石

茂木和子

稀香さん新珠賞おめでとうございます

稀香さんあなたの行動の早さにびっくりしています、と申しますのも二〇二〇年の二月発行所に「俳句の勉強をしたいので、どんな句会が何時何処でどの様な形で行われているのか教えて欲しい」と云う旨の電話がありました。電話で色々お話しするよりもと思い早速一月号（水明例会及び各地区会教室の御案内）を送りその中から検討して頂くことにしました。直接主宰の指導を望まれ三月には誌友となられ、五月の第一例会から出席される様になりました。

第一例会は席題と文字の詠み込みで三句、一時間内で作句しなければなりません。初めての方には仲々難かしくハードルの高い句会だと思うのですが、幾子さんは何なくクリア。水明集にも積極的に投句されいきなり五句欄に。本人は至って謙虚に嬉しさを噛み締めていました。

幾子さんは始めから俳句に興味があったわけでも好きなわけでもなかったそうです。しかしお母様の遺品の句帳の中に幾子さんを詠んだ句を見つけた時、水が土に吸い込まれる様に俳句と云う未知の世界に惹かれたといわれます。当時お母様が詠まれた句

蟻を見る尻逆立ててをる児かな

因にお母様は俳句誌「若葉」に永く在籍されていたとの事、この様な御縁から近くの公民館の俳句の会に誘れて幾子さんは勉強されていました。現在その句会はありませんが、当時浦和市俳句連盟？で募集した俳句大会で見事優秀賞に

散り急ぐ花を宥めて川緩く
空色にさざめいている犬ふぐり
野仏に蒲公英満ちて供花となり
用水のおはぐろ蜻蛉薄き影
実一つ取り合ふ鴉雪の原

俳句の基本である写生がしっかり出来ていて詩情も感じられます。この頃から俳句の楽しさに目覚められたのではないかと思います。

第一例会に入られても特選の連続

大空へ小鳥を放つ新樹かな
湯上りの子等は裸族や天瓜粉
向き替へて吾を値踏みの蜥蜴かな
若葉に覆われて瑞々しさが匂う樹々から勢い良く飛び立つ鳥、希望と若さが滲み出ています。

湯上りの子供に汗知らずを撒布する様子、逃げ回る子供を追いかける大人、仲々捕まらない子供を裸族だと突き放した表現により一層リアルに可笑しさが伝わって来ます。

蜥蜴と出会した作者が蜥蜴に値踏みをされていると云う誠にユニークな発想、これは作者の感受性が云わせたのか、そ

れとも…。この句は後に上五を「振り向きて」と表現を変えています。ここに気付かれたのは立派。「向き替へて」では作者と蜥蜴の位置関係が不明瞭「振り向きて」ではじめて作者と蜥蜴が対峙しているのがはっきりします。値踏みの結果は？其の後毎月水明集に投句される様になりました。

二〇二〇年水明九十周年記念号の投句には幾子改め稀香の名で投句されています。主宰よりこの節目の年に俳名を考えたら如何かとのお話しを頂き考えた末に稀香と名乗らせて頂く事にしたそうです。

俳名の由来は祖母の稀香の名をそのまま「音」読みにして稀香。稀香の名は当時の陸軍大将乃木希典（日露戦争の司令官として旅順攻囲戦を指揮し後に学習院の院長をされた。明治天皇大葬の日に妻と共に殉死）を敬愛し尊敬していた祖母の両親が将軍の一字を頂いて付けたと聞きました。おばあちゃん子だった稀香さんは、迷わずその名を頂きました。

水明九十周年合併号

取り合ひの如雨露一つやチューリップ
春泥を撥ね上げ兎横抱きに
仕方なくバイエルを弾くみどりの日
大人ぶる口調となりぬ蝌蚪の脚
朝粥や乱反射せる柿若葉

幾子改め稀香いきなり五句でした。日常の生活の中で見過されてしまいそうな事を日記の様に書き留めておけるのも俳句の良い所だと思います。

稀香さんは昭和二十七年東京生れ四歳の頃浦和へ越して来られて浦和育ち、見沼の景色を身近に感じながら過されたといいます。御主人はじめお子様御夫婦は共に教職に在り、お孫さんにも恵まれ、今一番充実し輝やいて居る時だと思います。

稀香さんは句が出来ると選評をして頂きたくてすぐ発表したくなるのだそうです。

新珠賞の応募も一番乗りでした。

めんそおれ宮古の空に虹架かる
漂へば海月の心地潮満つる
機窓より離れ行く海夏惜しむ
島唄の流るる浜辺星月夜
道沿ひの大き家墓梯姑咲く

夏の沖縄を題材にした旅行吟です。しかし只の旅行だけではなく過去の沖縄にもしっかり向き合い想いを寄せて、

空と海溶け合ふ砂糖黍の果て
この橋の沖へ道なす雲の峰
やどかり過ぐる米兵の上陸地

等しっかり詠まれていると思います。

主宰も力のある作家と将来に期待を寄せておられます。俳句は手元足元から、言葉は優しく詩情の感じられる句作りを心掛けて下さい。

新珠賞に「同人」と云う花を添えられ、若鮎の会にも入られました。これからも個性豊かな作家として稀香俳句を遂行して行って下さい。

初めてお目にかかって一年余り「新珠賞」同人昇欄、実力のある方だと思います。

改めてもう一度　稀香さんおめでとう。

自選二十句

新　暦文

碁仇の肩まで捲る藍浴衣
懐の手にも月光龍馬像
輪唱の子等の降り来る春の山
番犬の大きな欠伸春うらら
わんぱくの揺らす吊り橋夏近し
うはずつたトランペットや秋夕焼
掛軸の富士の裾野に鏡餅
早春の芝生に騒ぐ豆画伯
陽炎を見つつ女の嘘をきく

盆栽を僅かにずらし日脚伸ぶ

蒲公英や山下清の笑ひ声

囀りや親子で探す森の精

菖蒲の湯負けず嫌ひの祖父と孫

杉玉に麹の香り春の風

骨切りの音に唾のむ夏料理

傷心のハートのかけら熱帯魚

今宵こそ想ひの丈を星月夜

土筆野や宇宙ロケット発射基地

宍道湖の蜆一晩飼ひにけり

瑠璃色の広きバンダナ風光る

夢の途中

日高道を

新暦文さん（本名文夫さん）と初めてお会いしたのは平成三十年二月のりそな俳句会に新しく参加された時でした。
それまでに皐月の会ですでに水明での俳句作りを始めておられましたが、更なるフィールドを求められてのことだったのでしょう。
自己紹介で、暦文という俳名の由来を伺いました。
暦文さんは昭和十六年生まれ。今年傘寿となられます。
二十五歳の時に脱サラをして会社を興され、一代で埼玉県でも有数のカレンダー制作会社にされました。現在はご子息に会社の経営を譲られ、七十三歳で俳句を始められました。
カレンダー会社の文夫さんで「暦文さん」、納得です。

古希すぎて無心で見上げる春の雲

暦文さんの処女作と伺いました。
会社人生をご子息に譲られ、穏やかに俳句に向きあおうとされている暦文さんの気持ちが「無心」にあらわれていて、既に俳句の才能は花開こうとしていたと思われます。
それでは今年の新珠賞応募作について少し振り返りたいと思います。
タイトルは「紙の雪」、応募十五作の第一句目の

初芝居髪に名残の紙の雪

から取られたものでありますが、暦文さんの無欲の視点が、結果としてこの心象あふれる佳句を生み出しています。
その他の応募作から印象に残った句を挙げると

さくら貝置く手のひらの未来よむ
百選の水の郷なる心太
懐石の品書き秋の声を添へ
老庭師のネクタイ姿文化の日

いずれの句も、それぞれの景と素直に向き合う作句姿勢と気負わず飾らない心の内が相まって良い句を生み出すことに奏功していることは間違いありません。
これは、暦文さんのご商売である、良いカレンダーづくりとも相通ずるものがあるのでしょう。
おそらく暦文さんはカレンダーに掲載する写真の選択眼を通じて、既に長い間をかけて、実は俳句作りの最も大切な要素を知らず知らずのうち身に着けてこられたものと思われます。
次に、これまで水明誌に投句をされた句の中から印象に残った句を鑑賞します。

天上に幕末三舟冬の星

幕末に江戸を救った「勝海舟」「山岡鉄舟」「高橋泥舟」と

冬の星を取り合わせた妙味。今の世に通じるものを思うのは筆者だけではないでしょう。
平成三十一年二月号の句ですでに佳句であります。

告白の背中ひと押し春の雷

暦文さんの句には時々俳諧味の溢れた楽しい句が見受けられます。平成三十一年五月のこの句には既にその素地を見ることができます。

道行を急かす矢切の青嵐

人情の機微を絶妙に詠まれる暦文俳句。ともすれば演歌の歌詞として陳腐になりがちな題材を上手に拾い上げて一句に仕立て上げています。

星月夜貧しき国の頭上にも

夜空の星を眺めた時、ふとこの地球上には戦火や貧困に苦しんでいる人々がいることを思わざるにはいられなかった作者の心の優しさを感じます。

囀や親子で探す森の精

水明令和二年七月号の水明集巻頭を飾った句です。
暦文俳句の句材は幅広いが、その底流には氏の気負わない無心の眼で見る身の回りの事象とともに、暖かい心根で感じる肉親の日常や夢が描かれます。
掲句も森の中で親子で森の精を探すという童話のような世界観を通じて親子の愛情を感じることができます。

鶴翼の布陣ぞ霧の関ケ原

雄大な句です。霧の関ケ原を目の前にして、四百有余年前の「天下分け目の合戦」を目に浮かべている作者がいます。

さくら貝運命線の上に置き
盆栽を僅かにずらし日脚伸ぶ
陽炎を見つつ女の嘘をきく

いずれも昨年の新珠賞応募句で選評で公開された句です。どの句にもしっかりした作者を感じ取ることが出来ます。
今年の受賞句とどこが違うかを考えました。
今年の句は、どちらかというと句の中の作者自身をそっと横において、客観叙景に工夫をされています。
一年間の試行錯誤の航跡が見られるように思います。

暦文さんの新珠賞受賞のことばに
「夢は近い内に八十年生きた証に自分の句集を出したいと思っています。」とあります。
主宰の講評にも
「さらに精進されて暦文俳句に磨きを掛けてもらいたい。」とのこと。
どうかこれからもお元気で俳句作りを楽しまれ、我々に、素晴らしい「暦文ワールド」全開の句集を届けて頂きたいと思っております。
この度の「新珠賞」受賞は、暦文さんへの「夢の途中」の贈り物ですね。

俳誌望見

梅澤佐江

『鳰の子』　令和三年四月・五月号　通巻四七号
主宰　柴田多鶴子　発行所　大阪府高槻市

平成二三年、柴田多鶴子が大阪で創刊。師系鷹羽狩行、檜紀代。「個性豊かに楽しむ俳句。各自の花種を開花させる」を理念とする。（隔月刊）

主宰詠「宝船」二〇句より

大き鳥飛びゆく方を恵方とす
お降りに黒松の幹引き締まる

一句目、視線の先の大きな鳥はいつしか瑞鳥の鳳凰のように目映い光を纏う。この鳥のゆく先こそ恵方と。二句目、お降りに洗い清められた黒松の亀甲の幹や松の葉の匂いは清清しく荘厳の気に満ちる感がある。

懸蓬莱甘味処の灯の淡し
疫神の乗る余地はなし宝船

一句目、戸口に飾られた懸蓬莱、歳神に守られた甘味処から客の幸せな息吹と柔らかな明かりが洩れる。二句目、宝船には疫病神だけは断じて拒否したいもの。佳い初夢を。

人歩き枯野は息を吹き返す

新春の野に若菜を摘む作者、知らぬ間に枯野は深い眠りから醒め逞しい生命力が漲っていた。

花実集　同人Ⅰ　主宰選　六名　各七句より

大阪の日和を讃めて残り福　春名　勲
種火にも似て家々の冬灯　師岡洋子
日の光風のなごみや春立てり　岩出くに男

光彩集　同人Ⅱ　主宰選　二〇名　各七句より

晴々と名乗り上げたし初句会　中井留美子
寒鯉の息潜めるも水煙　永野壽一
人日や行動予定の見直しす　中村金雄

湖心集　同人Ⅲ　主宰選　三三名　各六句より

鴨を見てをり恋人を見るやうに　長野（ちょうの）順子
花八手住む人のよく替はる家　中村比呂志
裸木へ二度三度撒く御礼肥　西村伸子

燦々集　会員Ⅰ　主宰選　二二名　各五句より

走馬燈真夜中の部屋別世界　山本享子
素麺干す万の狭間を風抜くる　吉川幸宏
左義長の爆ぜて泣き出す赤子かな　吉田あゆみ

青葦集　会員Ⅱ　主宰選　二四名　各五句より

節分や女将は桃割れ照れながら　渡辺芳洋
絨毯の赤褪せ子等は巣立ちたり　足立若水
養鯉場水面静かに寒に入る　小谷末子

水草（みくさ）集　会員Ⅲ　主宰選　三〇名　五句～四句より

春待つや顔の強ばる仮免許　藤林ルミ子
冬の日や三密避けて畑へ出る　仲田　善
初夢やコロナに勝つて大宴会　渡邊和江

この他「芽ばえ集」の児童・生徒作品、小学児童応募作品、エッセイ、随筆、郵便紙上句会、メール句会、リモート句会等々充実した誌面作りで最後迄読み応えがあった。

山本鬼之介　選

水明集

山青葉人の途絶えし古道行く　熊谷　越田栄子

卯の花や手帳に父の闘病記

喉越しで選びたき日のビールかな

消し込みの竿のしなりや風薫る

幾度も目高を覗く母待つ子

海峡の大橋越えて初蝶来　さいたま　保坂翔太

渓谷をつなぐトロッコ山桜

落武者の裔の集落蕨干す

百千鳥上野の森の声楽科

本校へ片道五キロ春の山

暮れきらぬ窓を打つ風菖蒲風呂　さいたま　曲淵徹雄

遠ざかる一片の雲楠若葉

影おとす沼さ緑に夏木立

沼薄暑朽ちかけてゐる丸太杭

青嵐ゆする杉玉ひしやげをり

卯の花や会話の弾む垣根ごし　高崎　原田秀子

真つ新なベッドシーツや夏きざす

生ビール心の間へも一息に

雨しとど俯きて居り花空木

アペリチフと言ひ訳しつつ生ビール

洲走の川のぼり来る薄暑かな　上尾　横山君夫

均らしたる薄暑の畝の白茶色

今朝の夏跳ねては沈む鯉の色

夏草に手を泳がせて河畔まで

はぐれたる山羊を沈めて夏の草

暗闇の明かき一点薪能　さいたま　反町　修

傘も七色雨の紫陽花生き生きと

ビヤホールの隅に芽生ゆる恋心

ハンモック雲にのりたる心地かな

夕立来土の臭ひの生温さ

銀輪の列なる山路薄暑光
夏草や一尺幅の人の径
神木は樹齢千年青嵐
闘志ある者こそよけれ青嵐
赤銅の漁師の胸や大南風

さいたま　染谷正信

夏始め机上に想ふ峰の色
雅なる社の屋根と著莪の花
初夏や黄の花咲かせ河の土手
ほろ苦き炊込みご飯初夏の味
夏場所や身を乗り出して声高し

塩野久子

うの花や五弁の白さ掌に移す
遠雷の火を消しにゆく消防車
みな腹をすかせて目高集ひけり
ひたひたと記憶くゆらす夏の川
一枚の葉に身を置きし雨蛙

熊谷　神田治江

鐘楼門くぐり古刹の白牡丹
寺参り終へて賑はふ牡丹園
初夏の風歴史散歩の列が行く
玄関に小さき靴や豆御飯
五月場所叩くまはしの音清し

さいたま　渋谷きいち

星川の水面に揺るる姫うつぎ
手料理とひと日終はりの缶ビール
視力落つ卯の花くたし絶間なし
葉桜のトンネル歩き思索かな
豊漁を信じ知床青葉潮

東京　鈴木和子

夏めくやポニーテールの女学生
薪能静寂を破る大太鼓
薪能情念燃やす籠籠
釣宿の下駄箱の閑卯波立つ
蚕豆や色鮮やかに鍋の中

さいたま　村杉清吉

五時間目校長室の白日傘
麦秋や社の杜の篠太鼓
師逝きて庭には白き鉄線花
夏霞窯出しの朝竦む足
夏霞限界集落写し出す

梅澤輝翠

一年分の写真の整理緑雨の午後
一つづつ棚田移ろふ夏の月
秘めやかに蛍火揺るる竹林
里山の夜を深むる蛍かな
御簾越しになほ美しき夏木立

平塚　丸屋詠子

火のはぜて闇衝く笛や薪能
手弱女が鬼女となりゆく薪能
少年や沖の卯波へ石を打つ
船頭の唄に寂あり卯波立つ
似てをらぬ似顔絵展や麦の秋

さいたま　橋本京子

桐の花隣の姫は器量好し
花桐や生家に今も古き蔵
北斎も眺めし海か卯波立つ
卯立波流木拾ふ人の影
夏霞沖に釣舟のまれ行く

笹本啓子

五月場所波打つ腹に勝名のり
今朝もまた昭和のはなし豆ご飯
初夏の風広き車窓の箱根号
牡丹生け姿勢正して座りけり
杖二人ぽつくり寺の牡丹かな

新　暦文

篝火や怨霊焼ぶる薪能
麦踏や亡母の遠忌修しけり
歌垣の筑波の嶺や樟若葉
葉桜や窓全開の大掃除
十年も立ち入り禁止若葉寒

加藤でん治

長閑なる矢尻の先の図星かな
ポケットに子猫手品でパンダの子
のどけきに図工鞄と遠出せり
行く人を美女と見紛ふ春日傘
手鏡で梳く黒髪よ春日傘

さいたま　新井孝麿

妖精に今もときめくこどもの日
オオミズアオの羽の揺らめき新樹光
華やぎのほぐし捺染若葉風
青鷺の狙ひ鋭き朝の湖
夫十年の丹精ここに苺盛る

越谷　阿部幸代

水美し農家の井戸や麦の秋
夕映えに荷車帰る麦の秋
泥だらけの農夫と牛や麦の秋
笑ひをる雨後の葉桜さはさはと
葉桜や笑顔の子らの砂だんご

さいたま　西幅公子

高階の窓全開に夏はじめ
新緑や間歇泉は天を衝き
土佐の旅浜で焼かるる初鰹
大家族統べし母なり新茶汲む
鍔広帽子嫁に贈らる母の日に

斎藤みよ

富士を背に小舟のみこむ卯月波　さいたま　千坂平通
由比ヶ浜卯波見守る頼朝杉
白足袋を運ぶ摺り足薪能
夕涼みあの手この手の詰将棋
詰め寄れば上がる歓声五月場所

麦藁焚く煙傾れる瀬戸の海　伊予　向井章子
麦の秋ベンチ一つの無人駅
浜に藁積み上げ土佐の初鰹
揺する役我拾ふ役実梅かな
梅漬くる瀬戸の粗塩傍らに

条幅を仕上げゆるりと新茶かな　杉戸　佐々木史女
スーパーの新茶試飲のいと旨し
むせかへる藤の薫りよ棚の下
満開へ色を重ぬる藤の花
春愁をうながす読経三回忌

束の間の砂上の城や卯波立つ　さいたま　竹澤和子
卯波立つ昔も今も常夜灯
カーナビに導かれ行く麦の秋
表札が取りはずされて鉄線花
濃く淡く八ヶ岳あり夏霞

風薫る下ろしたてなるスニーカー　草加　外村紀子
夏草のなびく彼方の廓跡
夏草や大極殿に鳶の輪
滝の音轟く連山雲速し
初夏の風地図を広ぐる秘境駅

リハビリの窓より残花よく見えて　さいたま　本橋稀香
五月来ぬ膝つき選ぶ陶器市
薫風はメタセコイヤの並木から
貴人めく牡丹に傘をさしかけば
芍薬のうなづきてより風に散る

夏草や探し当てたる父祖の墓碑　春日部　諏訪サヨ子
湯上りのアロマの微香夕薄暑
階段に猫の微睡む街薄暑
夏草や渡良瀬の地に義民をり
石楠花や日光連山峰光る

春昼に寝床にしやがみ広辞苑　さいたま　和田仁八郎
雨の這ふ幹の花びら遅ざくら
薔薇の芽燃ゆいまだに恋はプロローグ
釣り人の無き沼畔木の芽雨
新緑の垣を流るる群帽子

耳鳴りを啓示と思ふ夏の風邪　藤岡　青木紀子
みかぼ嶺も秩父の山も鳥ぐもり
ロザリオの鎖の光る梅雨晴間
毛虫火に投げてシスター十字切る
音符など読めぬをとこの草の笛

起立・礼元気溌剌葱坊主　若狭　山﨑郁子
通勤の靴と鞄も更衣
開襟のシャツの水色更衣
この峠越ゆれば生家桐の花
研ぎ立ての刺身包丁初鰹

麦秋を縫ふ少年の自転車よ　さいたま　菅原真理
鉄線花粋な女の胸のうち
夏霞見知らぬ街に立つごとし
青鷺のすつくと立つや何を見む
青鷺やゆるりゆるりの足運び

ほつれゆく飛行機雲や初夏の空　篠﨑紀子
カーテンの裾を舞はせり初夏の風
緋牡丹や雨の山門灯しけり
しなやかな発想満つる夏料理
老いし身にふるさと想ふ豆御飯

桐の花声の綺麗な薬剤師　さいたま　森　和子
酒蔵の鏝絵の青や桐の花
大輪の薔薇を揺らして都電過ぐ
声のトーン上げて再会薔薇祭
久久に晴れ渡る朝鯉のぼり

お出かけの妻の書置き豆ごはん　伊奈　菅原卓郎
杉玉の下がる軒先菖蒲挿す
根切虫闇に蔓延る刺客かな
お返しは布巾かぶせる豆の飯
折りじわが残る制服更衣

山吹の揺るる山路に忍びけり　若狭　岡本祥子
力漕のオール捌きや初夏の湖
桐の花当時余情の屋敷跡
群を抜け健気自立の蛙の子
教室の間隔置きて衣更

水仙の香りひそやか夫命日　さいたま　霜多光代
早朝の薫風ひときは身を包む
薫風や庭のそこここ雀らは
友の訃報届く夕べや藤の花
遠景の村落包む雲の峰

薫風や手を振る君へグッドバイ　草加　持永喜夫
有明に映す残り香春の夜
梅雨寒に遺せし思ひ綴る夜
手に汗し落札あとの夕薄暑
薄暑来ぬ沢に吹き添ふ青飛沫

葉桜の色もまた佳し花の後　さいたま　山岸久美子
葉桜に包みこまるる父母の墓
葉桜の奥から聞こゆ読経かな
眼の端に葉桜入れて逆上り
白波をのせてうねるや青葉潮

風薫る紙飛行機の描きし弧　橋爪さなえ
髪を切る肩の透き間へ風薫る
逆上がりの空を突く靴風薫る
長竿の囮の泳ぐ鮎の川
膝痛し老いを認めし額の花

手の中に蝶ゐて吾に見せにけり　池田珪子
蝶二頭の追ひつ追はれつ薄曇
その色を置いて行かぬか紋黄蝶
雲ちぎり蝶描きたし青空に
てふてふについて行きたし知らぬ地へ

隣家からの越境筍朝採りす　さいたま　田中泰子
鯉幟の川面に幾千町起し
蜂の巣にピント合はせるおよび腰
廃校の隅にひつそり鯉幟
道標大きく傾ぎ藪椿

園庭に大きなる目の鯉のぼり　川崎　鈴木玲子
武者人形横に屈託なき笑顔
新緑やそろりそろりとかづら橋
飛魚の真直に青き飛行隊
子どもの日玩具箱にはメダル三つ

風薫る青く染めたる革表紙　さいたま　元田亮一
風薫る水性ペンの青き文字
放課後の窓際にをり風薫る
金管のかすかな調べ風薫る
立ち漕ぎで上る坂道風薫る

放牧の草食む馬の陽炎へり　後記朝香
御社も狛犬もかぎろひの中
蘇枋咲く古民家風の喫茶店
若き日の反抗の理や紫荊
父母のアルバム繰るや花の雨

行く春や荒川の鯉跳ねいづる　さいたま　秋谷信一
山くだる愛宕の樒忘れ霜
夏立つや雀飛び立つ骨董店
利根川や夕陽たなびく麦の秋
葉桜の息吹き溢るる吉野かな

潮干狩空と交はるところまで　奥山粉雪
しやりしやりと別れ霜の音故郷の音
川舟や映る柳を分け進む
テーブルに頬杖をつき春の暮
なにもかも淡淡とせし長閑さよ

湯上がりのペディキュアに紅夏近し　岡田宣子
水中を攫ひ翡翠飛翔せり
糸杉があらばゴッホや麦の秋
仲見世へ寄せる人波三社祭
母の日や締めには母のむすび乞ふ

大振りの蕗の葉揺する風一陣　鈴木藻好
ビル街に黒南風帽子目深にす
コーギーの足下潜る南風
母の日と息子に告ぐる老母かな
ままごとのお代は葉つぱ聖五月

パソコンに一念発起初鰹　さいたま　川村　治
遠雷に静かに止まる観覧車
踏みしめた我が麦畑そつとなで
黒潮の香り背負ひて初鰹
いたづら子逃げるに邪魔な麦稈帽

麦の秋麦ストローでエコ戻る　小川洋子
吊橋の下の大岩さつき波
入江の端の食事処や卯波立つ
卯波立つ浜辺姉妹で童心に
鉄線花蔓伸びるほど花舞ひて

高らかに大般若会や風薫る　小浜　松島寛久
失恋の意外と重し雁帰る
若桜町長は若き宮司なる
呵呵と笑ふ羅漢や片肌脱ぎ
行く春や佐久間艇長の湾静か

降りかかる災禍鎮めよ山若葉　さいたま　山戸美子
珈琲に柏餅添へ今朝の経
三姉妹嗜好銘銘柏餅
降る雹に無防備愛車打たれをり
蔓薔薇の窓を囲むやハート形

失言に頬を染めたる牡丹園
雛罌粟（コクリコ）に散歩の軌跡点と線
伴走のママチャリきらり新樹光
那須岳の新樹の中の唯一人
マイカーが那須の新樹に飲み込まれ

代々の墓に誘ふ山うつぎ
卯の花を越して近道回覧板
畑仕事終へて褒美の缶ビール
泡の髭おどけて和むビアガーデン
花博士ルーペ一面花うつぎ

紀ノ川をまたぎて千の鯉幟
香りたつ藤のトンネル抜けて海
藤ロード脚のスイッチ強にして
亀鳴くをひたすら待つや壕に立ち
心字池に散りて牡丹の万華鏡

葉桜の上葉を照らす入日影
四方より集まりきたる夏の潮
うねり来る朝間の海や青葉潮
葉桜の下をシーソー低くゆく
さやさやと葉桜の密羨まし

さいたま　飯田忠男

さいたま　緒方みき子

和歌山　嶋田洋子

川口　新井のり子

カフェテラスより広がる海を夏霞
迷子放送の空に青鷺飛んでをり
卯波蹴り明石大橋くぐる船
夏めくや本栖湖に立つ逆さ富士
丸木橋渡れば広き麦の秋

風五月きらめく木木の声聞かむ
竹皮を脱いで天突く気魄かな
子雀の零れては飛ぶ排水口
亡き姉妹手を振る夢や明け易し
やはらかき水羊羹も匙を逃げ

夏めくや娘肩出し臍も出す
こりこりと砂肝つまみ生ビール
人の海みこし木の葉か三社祭
夏きざす酔客寝込む駅ベンチ
働ける幸しみじみと菖蒲風呂

姉いもうと幼なライバルさくらんぼ
熊野古道とて只の道草刈女
丸髷の母の面影夕端居
ハーフの子といつも仲良しサクランボ
目の前で挽ぎし空豆賜りぬ

さいたま　森下美智枝

横浜　山岸弘子

吉川　杉浦理恵

いすみ　平石睦子

一筋の「きぼう」の軌跡春の月
雲梯に花影散らす花水木
一瞬にゲートの開く競馬初夏
絵手紙の魚の眼光る夏始
一族に紺屋の屋号藤の花

さいたま　森美枝子

葉桜や閑かにおはすかな女句碑
歳時記と遊ぶ楽しさ葉桜に
葉桜や教師と生徒グランドを
葉桜の濃き影を踏み散歩道
白浜や遠く沖行く青葉潮

遠西勢津子

税務署を出で街中の沈丁花
通勤の上着まちまち忘れ霜
潮干狩尻濡れしまま帰宅かな
日の照らす父の背中や潮干狩
夏近し野球ボールの軽き音

小林京子

線路際こんなとこにも花大根
行く春や小筆に墨を付けしまま
出不精の人も笑顔や花吹雪
春暑し手持無沙汰の大欠伸
ライラック歯痛やはらぐ春の昼

水野興二

人多し三社祭は渦の中
三社祭ソイヤソイヤの声高く
新緑の色とりどりや写生会
十薬や母亡き庭に守り人
麦の秋黄色の帽子見え隠れ

さいたま　小駒さち子

風薫る子等の歓声夕の杜
薫風や見上ぐる大樹空の青
薫風に焼けたばかりのスコーンかな
片手見の旅行のパンフ鮎を食ふ
顔認証小窓に映るサングラス

山川　順

薄味に慣れて退院春景色
山藤の野太き声を聴きにけり
のどけしや欠伸の妻の生返事
公園の鳩に餌やる五月祭
暮の春本棚の塵拭ひをり

若狭　檜鼻ことは

得意げに僧の手首に汗手貫
鶏絞むる命の重さ夏盛ん
思ひ出の小紋台無し紙魚食うて
歓待の白百合の香の居間に満ち
病葉の海流に乗り無我の境

さいたま　古池恵里子

春灯し白木の箸のお食ひ初め
通販の送料無料新茶買ふ
湯の里をゆるりと進む花筏
母の日の母を真中に三世代
菜種梅雨水の膨らむ丸木橋

さいたま　湯浅　和

川縁の水車の廻る麦の秋
お出かけの化粧濃くなる麦の秋
コロナ禍の三社祭や疫病（えやみ）封じ
三社祭白足袋眩し舞ひ姿
びんざさら三社祭の江戸の粋

木村るみ子

髪束ね高くまとめて薄暑かな
塗替えた外壁眩し薄暑かな
路地裏に三味の音淡く日永かな
菖蒲湯に独り来し方行く末と
薫風やコロナ禍マスク無表情

東　京　河原叔子

清らなる音添へ注ぐ新茶かな
茶処に拘る御仁新茶くむ
薄色のスカーフあそび若葉風
朝日受け透ける肌合ひ柿若葉
父の日の花束孫に持たせをり

柳父はる

黄に赤に若葉幼き色を持ち
神あらば神輿なくとも三社祭
神の手や若葉の底より仰ぎ見む
桜若葉父の手を引き地蔵堂
若葉風地蔵の供物に飴三つ

東　京　山中いちい

母の日や母の着物を染返し
藍浴衣藍の染師の手も藍に
新樹光疲れ癒され深呼吸
絡みつき垣根鮮やか鉄線花
沖合の汽笛一声夏がすみ

さいたま　野村美子

若竹や重き花壇をつき上ぐる
薫風やウィンドに写す我が姿
五月雨や鯉もどこかへ隠れたか
背中つく荷台どつしり春大根
川の面に写る木々にも夏来る

和歌山　南條きわゑ

屋久島の飛魚キラリ空泳ぐ
新緑や羽織りしシャツは下ろし立て
踏切のかるがも親子電車止め
鯉のぼり泳ぎ切れるか天竜川
在来の誇り持ち咲く山法師

東　京　畑宮栄子

春の灯や夜半の戸口に鍵の音
母の日や嫁と姑の二人母
母の日やベンチに座る母偲ぶ
母の日に海産物の仕出飯
母の日の母の料理に舌づつみ

さいたま　武田重子

麦畑光と風に遊ぶ禾
「土蜘蛛」の松緑あやし夏舞台
一献を観音様へ三社祭
夏の夜宇宙の真中何処かな
夏場所やドンと突き出す待つたなし

綿貫ひさの

苺のジャムレシピは農家若女房
青鷺や終の住栖となりし町
オカリナの響き若葉の能楽堂
若葉時ピアノ連弾姉いもと
いちご柄ブラウス姉妹苺食ぶ

宮代　関谷多美子

蚕豆の翡翠の色を食べにけり
口論も忘るるほどやはじき豆
蚕豆を茹でて独りの食前酒
友に会ふ嬉しき明日や髪洗ふ
髪洗ふ手先優しく丁寧に

さいたま　高原和子

青葉潮サーファー胸を熱くして
サーフボードがもてあそばれて青葉潮
青葉潮幾多の魚を集めけり
葉桜がトンネルをなす散歩道
葉桜の梢に今宵月赤し

川口　田村福美

薫風を肌にコロナの注射打つ
園庭に畳み皺ある吹き流し
矢車や朝風わたる園庭に
コロナ禍に出羽から届く柏餅
初孫や送る家伝の笹粽

蕨　細井良子

通学路みかんの花の匂ふ頃
裏庭のどくだみの花風にゆれ
祖母の忌や仏間明るきアマリリス
柿若葉つるりと落ちて今朝の雨
くもり空雨待ち顔の茗荷竹

鬼石　加藤ナヲ子

花の香の洗濯物に絡む蝶
廃工場門扉に絡む青き蔦
葉桜や羽田を目指すＪＡＬマーク
起き抜けのまなこに眩し若葉風
我が郷は嫁にも強ふる水盗人

東京　水落守伊

旧友を待ちて地ビール注文す
自宅にて世界遺産の島ビール
白波に空木の花の揺れ交り
卯の花に届く指先乳母車

今朝の夏ワクチン予約殺到す
手かげんのなき王手飛車子供の日
釣竿の手いれ入念子供の日
夏木立鞍馬の天狗あらはるる

鬼灯のこの世を照らすスペクトル
母の墓蜩のこゑをしみなく
蚯蚓鳴く星をかぞへて旅の中
黙約は秋風ふきて消えゆけり

新調の背広の湿り夏はじめ
初夏や真青の空に映ゆるシャツ
豆飯の炊ける匂ひを嗅ぐ家路
塩加減よきあんばいの豆ごはん

夜明け前悔し涙に髪洗ふ
空豆のかくも優しき色なりし
忘れたき人を偲びて髪洗ふ
南へと伸ぶる茎と葉夏近し

東京　飯室夏江

和歌山　髙橋満耶子

所沢　関根千恵

さいたま　鳴海順子

山下ユリ子

母の日や感謝を文に認める
焼き鮎と白く輝く化粧塩
囮鮎ここが最後の晴れ舞台
夏に入る棚田に映る水面の月

亡妻(つま)を恋ふ話ひかへめ春の夜
亡母(はは)植ゑし却初のざくろや木の芽吹く
母の日や花とケーキを持参の息子(こ)
新築の祝ひに行くにも夏マスク

息子よりひときは赤きカーネーション
酒蔵跡空へ空へと桐の花
免許証の更新講習麦の秋
母の日や母となれたるよろこびを

「永徳」の獅子の背見たり麦の秋
麦秋やパフスリーブの少女笑む
三社祭観音裏に昼ワイン
夏の朝中空を裂く新航路

しめしめと夜酒のあてに庭の蕗
卯波立つ眼下離島の滑走路
庭の蕗刈りて悲鳴の老の腰
誰が畑か蕗いつぱいに放(ほか)しをり

さいたま　梅津幸代

藤沢　小島喜代子

鬼石　榊原聰子

さいたま　横山礼子

北出久美子

月山の雫一滴さくらんぼ　さいたま　福田育子
青嵐白栲の衣や掛念仏
木下闇抜けをり先の富士の山
風孕み駆け出す子等に青嵐

巨大なる飛行機の影麦の秋　樋口元美
麦の秋笛吹きながら一列に
「セイヤ」なし神輿もなくて三社祭
ふたたびの担ぎ手なきて三社祭

長男の嫁の忍忍花樒　大阪　遠藤人美
伽羅蕗を足し弁当の飯を足す
公園の民に恩恵あいの風
図書館の玻璃に木香映えて夏

待ち望み新芽に和む百日紅　さいたま　落合和枝
単衣もの透けたる腕を隠しをり
鉄線花思はず止まり魅せられし

忘れ霜庭の小花の身を縮め　石浜悦子
ほろ苦き思ひ出もあり蕗のたう
足もとの大地の温み草萌ゆる

詩と句のはざまを叩く尉鶲　小川藤間友二
雲の峰湧き出て少年塾へ行く
裏町の長屋横丁梅雨の闇

夏行延期

夏行を延期し「菊凪」句会とし開催。
水明誌上でのご案内では、間に合わないので、関東地方の方には、お葉書でご案内を差し上げました。

水明夏行　延期（７月29日・７月30日中止）
菊凪句会　**11月29日(月)、11月30日(火)**
葉書ご案内の11月28日は中止

※追って水明誌上（10月号・11月号）で詳細をご案内します。

作品評

山本鬼之介

幾度も目高を覗く母待つ子　越田栄子

筆者が子供の頃は、小川や田圃などに目高が沢山いて、無造作に捕まえて遊んでいたものだが、今では自然環境が様変りして、特に都会では好き放題に捕獲することは不可能となり、ペットショップで買い求めてきて金魚と同じように大事に飼育鑑賞を楽しむものとなった。緋目高を初めとして観賞用に品種改良された目高の種類は驚くほど多いようで、大人の愛好者も増えているようだ。

保育園で、幼子が母の迎えを今か今かと待っている様子が窺える。すばしこく泳ぐ目高に飽きることなく眼をそそぎ、そして、母が来る方角に眼を配る。幼児の一途な気持がよく伝わってくる佳句である。

海峡の大橋越えて初蝶来　保坂翔太

日本の海峡（水道を含む）を数えると四十余にもなるが、海峡に大橋をセットすると大幅に数が絞られ、本句のモデルは、観光ルートとして有名な明石海峡大橋と来島海峡大橋（しまなみ海道）ではないかと思う。前者は、世界一長い吊橋として知られており、初蝶には最も相応しいように思える。事実はともかくとして、今年初めて見た蝶が、はるばる四国から海を渡って来たかと想像するだけで夢の世界が広がり、豊かな詩情が生まれる。

遠ざかる一片の雲楠若葉　曲淵徹雄

快晴の空は実に爽快であるが、何時までも空を眺めていると飽きてくる。豪華な料理の後でラーメンが食べたくなるようなもので、空に何か添え物が欲しくなる。雲がその役にぴったりだと思う。季節毎に雲が姿形を変え、名前が付いていて俳句の季語になっている。上空の風によって塊から千切れた雲が、流されて次第次第に視界から遠ざかって行く。人生における親友の一人が、何かの事情で自分から離れて行くような淋しい気持になっている。地上にしっかりと根を張った楠大樹の若葉が、絶大な存在感を呈している。

真つ新なベッドシーツや夏きざす　原田秀子

清涼感の溢れる俳句である。一般家庭のものであれば、平

穏な家族関係を、病院のものであれば、退院が間近い患者の喜びを連想させる。「真っ白」ではなく、「真っ新」であるところに句の厚みがある。

夏草に手を泳がせて河畔まで　横山君夫

葭切が騒がしく鳴き交わす利根川の川端を思うと、実にぴったりとする俳句である。「手を泳がせて」が人物の姿と動きを鮮やかに映し出しており、句の価値を決定づけている。

暗闇の明かき一点薪能　反町修

ドローンが撮影した薪能の舞台の映像を見る思いである。上空から徐々に下降して舞台の様子を映し出して行くが、まだ高空にあるカメラが、杜に囲まれた会場の一点を絞り込んでいる臨場感がひしひしと伝わってくる。

赤銅の漁師の胸や大南風　染谷正信

灼熱の太陽を浴びる船上の作業で日焼けした漁夫の分厚い胸に焦点を当てた重量感に満ちた俳句である。普通なら「腕」と表現するだろうが、それを「胸」にしたところに作者の狙いと思いがあると見た。この日の豊漁に赤銅色の胸を張り、大南風に大漁旗をはためかせて凱旋する漁師である。

夏始め机上に想ふ峰の色　塩野久子

揺れ動く若葉の影が遊ぶ机上で、昔の登山写真を懐かしんでいる作者である。写真は少し色褪せてはいるが、あの時の夕陽に染まった峰の色が今でも脳裏に焼き付いている。

遠雷の火を消しにゆく消防車　神田治江

落雷による火災には、落雷によって山野などが燃えるいわゆる山火事の直接雷と、落雷によって発生する放電現象などが原因となる間接雷の二つに分けられるが、火災原因と発生件数では後者が圧倒的に多いと言う。掲句の火事もおそらく後者によるものと思われるが、自然災害に似たもので、損害賠償を請求することも出来ず、損害保険も簡単ではないように思える。

遠くで鳴っていた雷によって何処かの町に火災が発生し、その火を消すために消防車が駆けつけていることを知った時、その人はどんなことを思ったのであろうか。そのようなことを考えると、この句がなかなか面白くなってくる。

玄関に小さき靴や豆御飯　渋谷きいち

普段は無い子供の小さな靴が玄関にある。子供が同居していない家の或る日の様子であることが判る。豆御飯を炊いた

老夫婦の家に、娘一家が招かれたと解した。元気の良い孫を中心に話が弾む。食欲をそそる豆飯の香りに、愉しい団欒の時が過ぎて行く。「小さき靴」が効果をなしている。

葉桜のトンネル歩き思索かな　鈴木和子

桜並木の遊歩道を想像する。花の時季は花見の人で賑わうが、今は散歩かジョギングの人が通るほどである。両側から伸びた枝が重なり合ってトンネルのように日陰を作り、なかなか佳い雰囲気である。さて、何の思索なのか。兼題「葉桜」を物にしようと思いを巡らせているのかも知れない。

薪能情念燃やす篝籠　村杉清吉

ぱちっぱちっと音を立てながら燃えさかる篝火。薪能には付き物の光景である。巧みな能の演技に魅せられて、観客の情念が次第に高まってゆく。篝火の勢いを増す松脂のように、能の演者の一挙手一投足が、観客の心の火を燃え立たす。

夏霞窯出しの朝竦む足　梅澤輝翠

陶芸作家の微妙な心理状態を詠んだ俳句である。登り窯の温度と時間の管理に最大細心の注意を払い、これで万全と思いながらも、その結果に一抹の不安を拭いきれない。早く結果を知りたい気持と、若しやと思う気持とが交錯し、窯へ進む足を竦ませるのである。筆者は陶芸の経験が無く、陶芸家からその時の心理状態を聞いたわけでもなく、手前勝手な想像で偉そうなことを書いてしまったが、お許し願いたい。

御簾越しになほ美しき夏木立　丸屋詠子

この句に詠まれている御簾は、おそらく神社の神殿に設えてあるものだと思う。神社の境内の夏木立が、御簾越しに一層美しく見えたのであろう。平安朝の世界を再現するような優雅な表現が素晴らしい。

船頭の唄に寂あり卯波立つ　橋本京子

卯波の海をゆく遊覧船の船頭が、客へのサービスにその地の民謡を唄っているのであろう。潮風に鍛えた喉が渋く、客の喝采を得る。古刹の石庭の寂とは異質な寂である。

夏霞沖に釣舟のまれ行く　笹本啓子

夏霞に包まれた海上を、沖を目指して進んで行く一艘の釣舟。霞の帷に見え隠れしている舟が、眺めている者に、まるで沖合に飲み込まれるかのような不安感を抱かせる。

牡丹生け姿勢正して座りけり　新暦文

花王の異称を持つ牡丹を生けている人。花の名を汚さぬよ

う、何時もより特別に姿勢を正しているかに感じる。花にも生ける人の心が通じるのか、際だった美しさを呈している。

葉桜や窓全開の大掃除　加藤でん治

梅雨前の葉桜の時季は実に爽やかで気持がよい。葉桜に目を和ませ、家中の窓を開け放って思う存分掃除に取り組む。昭和のよき時代、秋晴れの日の隣近所揃っての大掃除を彷彿させる俳句である。

長閑なる矢尻の先の図星かな　新井孝麿

時候の季語である「長閑」を鋭い矢尻に冠したところが面白い。流鏑馬か弓道場の的だと思うが、一般的には「図星」という言葉をつかうことが少ないので新鮮味がある。

夕映えに荷車帰る麦の秋　西幅公子

おそらく、作者が子供の頃に接した農村の光景を現代に置き換えて詠んだ俳句かと思うが、言葉の一つ一つに牧歌的な味わいが反映されていて、なかなか魅力のある作品である。

土佐の旅浜で焼かるる初鰹　斉藤みよ

見たものをそのまま詠んだ旅行吟だと思うが、音に聞こえた土佐の一本釣りで獲れた初鰹をその浜で焼くという新鮮さと豪快さに、思わず食指が動いてしまった。

富士を背に小舟のみこむ卯月波　千坂平道

富士山と松原と帆掛け舟の壁絵が、昔の銭湯の定番であったが、本句を読んであの懐かしい絵が還ってきた。現代では小型ヨットになろうが、筆者としては帆掛け舟に愛着がある。

浜に藁積み上げ土佐の初鰹　向井章子

先に書いた斉藤みよ氏の句に併せて読むと、その情景が克明に伝わってくる。藁火を使ってじっくり焼いた初鰹となれば、好事家ならずとも思わず喉が鳴ってくる。

満開へ色を重ぬる藤の花　佐々木史女

あの幽玄な藤の色合いが簡単に生まれるものではなく、日一日の藤の精進によってなされることを掲句によって識ることが出来た。来年藤の花に出会ったら、この句を頭に入れてじっくり鑑賞してみたいと思う。

薔薇の芽燃ゆいまだに恋はプロローグ　和田仁八郎

寒気が遠ざかって薔薇が芽吹く。丸味を帯びた芽や、細く鋭い芽もあって、どんな花が咲くのか楽しみである。薔薇の芽を、「恋のプロローグ」と詠んだ作者の感性に讃美を贈る。

水琴窟

（水明集六月号鑑賞）

池田雅夫

若草や御役御免の三輪車　平石睦子

萌え出たばかりのやわらかな若草の広場で遊ぶ幼子。かつては三輪車に乗り遊び回っていたが、今はその三輪車も小さくなり、自転車に代ったのだろう。役目を終えた三輪車への敬意とねぎらいの気持ちが「御役御免」に表われている。

歌声の響く校舎や風光る　葛城千世子

吹きわたる風さえ光っているように感じられる麗かな春。自然に囲まれた学校から、ピアノの伴奏に合わせて歌声が聞こえてくる。文部省唱歌などを音楽の時間に教えてもらったものだ。「花」などを輪唱、二部合唱したことを想い出す。

白木蓮夜は公園のシャンデリア　細井良子

紫木蓮の樹高四～五メートルに対し、白木蓮は十五メートルほどと高い。青空に白い花が映える。芳香があり、よく目立つ。夜の公園の外灯に木蓮の白い花がシャンデリアのように見えた。「シャンデリア」の例えが「夜の公園」に合致。

折れてまで勢ひありし山椒の芽　南條きわゑ

古くから香辛料として利用されてきた山椒。その若芽は摘まれて「木の芽」となる。折れてさえ芽を出す山椒の生命力を称えている。「折れてなほ」として未来への希望を表そう。

一本の前歯ぐらぐら入学す　森和子

乳歯が抜け、永久歯に生え替る幼児期。前歯の一本が抜けそうなった。入学の不安と期待、意気込みなど揺れ動く気持ちを「ぐらぐら」の中に込めている。必要最小限の言葉でみごとに入学児の心境を言い表わしていて歯切れよさに共感。

西空に笹舟のやう春の月　河原叔子

西空の月は日没後に見える月。春の月には艶やかな風情が感じられる。「笹舟」は笹の葉を舟の形に折って水に浮かべて遊ぶもので、小さいころよく遊んだものだ。五日月ぐらいであろう。空は水面、月は洋洋と漕ぎだす「笹舟」なのだ。

最初はグー今チョキくらゐ花辛夷　水落守伊

「花辛夷」をじゃん拳になぞらえた発想に驚いた。3～4月、葉が開く前の枝いっぱいに芳香のある白い花を咲かせる。北国ではこの花を農作業を始める目安にしている。「今はチョキ」というのだから三分咲きくらいであろう。

泡のごと遮断機の鳴る春の暮　元田亮一

踏切りの警報音はかなり離れたところでも聞こえてくる。都会ではあまり見かけなくなったが、郊外では多く残っている。その遮断機の鳴る音を「泡のごと」にたとえた発想力に感心した。春の暮の心境を儚い泡に重ね遮断機の音を聞いている。

黒猫のびつくり眼春の雷　鈴木藻好

「春雷」は一つ二つ鳴ってそれっきりというのも珍しくない。不安定な気候によるもので予想がつかない。突然の雷鳴にびっくりした猫の臨場感が伝わってくる。のどかさを打ち破る春の雷に猫さえ眼を丸くしたのである。

蕗の薹壊れしままの水車小屋　森美枝子

かつて農村では水力を利用して精米や製粉などを行なっていた。今は電力に代わっている。使用されなくなった水車小屋は壊れたまま放置されている。原風景のような水車小屋に哀れを感じているのだろう。「蕗の薹」に郷愁を誘われる。

リラの径足音軽くなりにけり　小駒さち子

「リラ」は「ライラック」とも呼ばれ、初夏に香りのよい淡紫色の花をつける。モクセイ科の落葉低木で高さは5メートルくらいになる。充分な推敲の末の「足音軽く」であろう。

猫の餌をついばむ野鳥風光る　北出久美子

屋外での猫の餌やり、察するところ、野良猫であろう。昔のようにご飯にかつお節などではなく、猫専用のキャットフードであろう。野鳥にとってもご馳走なのであろう。「風光る」が動物たちへの慈しみをもの語っている。

温む水指輪はづしてバシャバシャと　樋口元美

寒さがゆるみ、水仕事や家事に精を出しているのだろう。「指輪はづしてバシャバシャと」に濯ぎ物をしている姿が目に浮かぶ。「水温む」ではなく、「温む水」としたところに水そのものが強調され、「バシャバシャ」とに結びつく。

目薬やあふれて頬に春の星　落合和枝

目薬があふれて頬を伝い落ちる。鏡の前の点眼であれば、その玉のような滴を見ることができる。「目薬や」で強調、詠嘆を表わしたいのであろうが、春の星が頬にあふれたことになっているので、「目薬の」として以下につなげたい。

春雨や相合傘の詣で道　安藤みえこ

「詣で道」の語が新鮮にひびく。春雨のこまやかな心情に相合傘の艶やかさが加わり容易に景が浮かぶ。二人の未来の祈願であろう。微笑ましい光景にやがて雨もあがるだろう。

山紫集

網野月を 選

葉桜のやさしき雨と出合ひけり　下川光子

葉桜や魔女は箒を磨き上ぐ　内田恵子

童顔のほくろ艶めき花は葉に　正木萬蝶

入れ墨の人と懇意に花は葉に　鳥羽和風

葉桜や彼女伴ひ故郷へ　町野広子

葉桜や剃刀負けの顎痒し　川崎道子

葉桜や背筋伸ばして矢を放つ　後藤綾子

葉桜や小犬と歩くあの紳士　阿部幸代

葉桜の木洩れ日の影幾何模様　田中章嘉

花は葉に吾子の願ひは絵馬に乗り　菅原真理

――以上特選

土手の草刈られて葉桜生々と　南條きわゑ

葉桜や友を見舞ふに回り道　西浦千枝子

葉桜やえにしの城に江島生く　西幅公子

葉桜を通りし風は水の音　野口和子

葉桜や「愛の賛歌」をアンコール　野田静香

葉桜や夜上りの道朝散歩　野平美紗子

葉桜に子らの声湧くつむじ風　橋本京子

葉桜やブルーノタウト住みし庵　原田秀子
葉桜や行き交ふ人も余所余所し　日高道を
葉桜や孫の押しゆく車椅子　福田千春
葉桜に埋む分校に響くカリヨン　藤澤喜久
み吉野の山がふくらみ花は葉に　保坂翔太
葉桜のさやぎに軽む積み残し　曲淵徹雄
葉桜や路上ライヴに陽の揺れて　松井由紀子
葉桜や無人の馬場にファンファーレ　丸山マスミ
葉桜や葉が擦れ合うて詩が生まる　宮﨑チアキ
葉桜や苔むす参道幟旗　村杉清吉
葉桜や袖触れ合うて段葛　森　和子
葉桜や昔のままの釣瓶井戸　森川義子

葉桜や弁当作り初出勤　森下美智枝
天空の杜の葉桜礼参り　森本早苗
葉桜の雨の匂へる換気窓　山岸弘子
葉桜の木洩れ日を踏むスニーカー　湯浅　和
葉桜や聖火走者が駆けてゆく　横山君夫
葉桜や優しさ力強さへと　青木鶴城
葉桜の九段に参る寡婦の杖　新　暦文
葉桜やネクタイきりり結ぶ朝　新井孝麿
大川を往き交ふ艪音花は葉に　荒井倶子
葉桜の影うつすらと妻の頬　池田雅夫
葉桜の枝容赦なく伐られをり　石川理恵
葉桜に似合ふはんなり京言葉　石田慶子

葉桜やローカル駅の半世紀　井関礼子　盛岡の石割桜花は葉に　加藤でん治

葉桜や太極拳の手が伸びる　井上燈女　花は葉に学校帰りの苛めつ子　川島典虎

葉桜の葉騒に送られ出航す　井上玲子　葉桜の坂道男の子武道具背に　河原叔子

街道は葉桜となり退職す　井口俊晴　葉桜の肌にふれたき光かな　神田治江

葉ざくらや猫の肉球ひやりとす　伊藤敦子　葉桜や華やぎあとの城下町　熊倉千重子

葉桜や無情の風には逆らへず　上戸千津子　葉桜に隠れしままのスカイツリー　河野はるみ

葉桜や息子と泊まる妙心寺　梅澤輝翠　花は葉に君と見し日の時計台　越田栄子

葉桜の西班牙坂や恋ゆかし　梅澤佐江　葉桜や見え隠れする今朝のバス　近藤徹平

葉桜の窓あをあをと阿修羅展　大場順子　花は葉に我を想ひし母懐ふ　斎藤みよ

葉桜や青空透けし常寂光　大塚茂子　葉桜を吹き抜けし風爽爽と　佐々木典子

ボール蹴る葉桜の中の空さわぐ　岡野順子　葉桜の下で四股踏む豆力士　笹本啓子

葉桜や平常心に戻る道　小倉倭子　葉桜も又楽しけれ飛鳥山　渋谷きいち

古希の声習ふは難く花は葉に　菅原卓郎

葉桜やみよちやん嫁に行つたとさ　杉浦理恵

葉桜をひとり歩くや今日も又　鈴木和子

葉桜や君逝く先の灯を点す　鈴木藻好

葉桜の中より駅のアナウンス　鈴木玲子

待ち人の来る御神くじ花は葉に　諏訪サヨ子

葉桜や部活で遅く吾子帰宅　関谷多美子

葉桜に謀叛の気配騒ぎだす　瀬戸雄二郎

花は葉にベンチで寝入る浪人生　染谷正信

葉桜に隠れて仕舞ふ美術館　高島寛治

葉桜やスカート嫌ふ女の子　髙橋満耶子

葉桜や散歩の犬の紐長し　武田重子

葉桜や後期高齢三年目　寺内洋子

葉桜やアンコール受けしつとりと　飛永　鼓

葉桜の影濃し吉野雨上り　外村紀子

☆

☆

山紫集作品評

網野月を

五月の兼題は「葉桜」でした。傍題に「桜若葉」があり、歳時記に拠っては「花は葉に」なども傍題として扱われています。「葉桜」は若葉を愛でる本意・本情が基になっていますが、「花は葉に」には移り変わる季節への意と情、つまり無常感が強く反映されています。見出し季語（歳時記上の用語で、基本季語と一般季語から成立します）と傍題とのこの微細な差異を使い分けたいものです。

葉桜のやさしき雨と出会ひけり　　下川光子

中七の「やさしき雨」が絶妙である。通常ならば「降られてしまった」というネガティヴな感情が前面に出てくるところであるが、掲句の場合は雨を許容しているのである。であるからこそ座五の叙法「出会ひけり」の感嘆へ結びつくのである。五月の季感を活かしつつ、作者の個人的な感性を巧みに叙している。上五の季語「葉桜」の若葉を愛でる本意を十分に活かしている、ということが出来る。

葉桜や魔女は箒を磨き上ぐ　　内田恵子

イースターを経て夏至へ向けて魔女は箒の手入れをしているのだ。アンデルセンかペローか、グリムのようなお話の世界観が根底にあるようである。上五の季語は時期の設定の感がより強いように思われる。

童顔のほくろ艶めき花は葉に　　正木萬蝶

座五の季語「花は葉に」は、ある（例えば角川などの）歳時記によると「葉桜」の傍題となっている。童顔に艶が出るということで、移り変わり、成長などとの本意と取り合わせた句作りになっているのだ。詠み手に確認したわけでないのだが「艶（いろ）」ではなく「艶（つや）」と読ませた方が良いであろう。まさか「艶（なま）めき」では直截的に過ぎて、台無しである。筆者の私的な感覚ですが。

入れ墨の人と懇意に花は葉に　　鳥羽和風

「刺青」ではないのである。いま流行の若者などのあれである。もしかしたら異邦人かも知れない。この作家の素材の非凡さには常に驚嘆している。

葉桜や彼女伴ひ故郷へ　　町野広子

中七の連用形は、座五の「故郷へ」のあとの帰省する意を

省略していることを暗示している。「彼女」は三人称女性代名詞の訳語である。掲句の場合は、フィアンセもしくは婚約者になるだろう女性と解したい。上五の「……や」の切れ字が絶妙なリズムを醸し出している。

葉桜や剃刀負けの顎痒し　川崎道子

真夏ならばヒリヒリするのだが、この季節は痒みがあるのである。実は治りかけということであろうか。女性句とは思えない趣向である。上五の「……や」切れと座五の終止形の設えを上手に使っている。

葉桜や背筋伸ばして矢を放つ　後藤綾子

弓道場の景であろうか?花の季節に各地の名所や境内、参道などで興行される流鏑馬がある。今年の競技を終えて、来年の披露目へ向けて気持ちを新たに鍛錬している景とも想像できる。「……背筋」がそういう想像力を掻き立ててくれていて、桜若葉との取り合わせが効果的である。

葉桜や小犬と歩くあの紳士　阿部幸代

中七の「小犬」であるが、「子犬」「仔犬」とする手段の可能性もあるだろう。無論、「小犬」の方が客観性があり、俳句としては正統であろう。突き放した言い方である。「子犬」「仔犬」はより近しい関係性を暗示することとなる。主観性が増すということである。事実とは異なるかも知れないが、そこは創作の領域である。なぜなら、座五に連体詞「あの」を使用しているのであるから、連れている「犬」の属性まで作者が知り得ても良いかと思われるのだ。

葉桜の木漏れ日の影幾何模様　田中章嘉

この世の全ての影は幾何である。視覚的な把握であるからだ。であるから作者の詠んだ「幾何模様」は特別なものなのである。想像するにこの「幾何模様」と何らかの事件が関連付けられているのである。つまりこの印象的な「幾何模様」を見る度にその何らかの事件を思い出す、ということである。嬉しいことなのか、哀しいことなのか、その何かは作者だけが知っている秘事である。この句は単なる叙景句ではなくて、心象句なのである。

余談だが、「葉桜」であるから、甘酸っぱいことではなかったかと思ったりする。

花は葉に吾子の願ひは絵馬に乗り　菅原真理

どこかの天神社でもあろうか。湯島であれば梅が有名であるが、むろん桜樹も植栽されている。もしくは氷川様かも知れない。いろいろとご利益のある社である。何しろ「絵馬に乗り」というのであるから、この願い事は叶ったのである。一句仕立てにして言い切ったところに絵馬の絵柄の勢いを感じさせる。

大村節代　選

鼓笛集

サングラス洩らしてみたき隠し事
十薬や野火止塚のひつそりと
男衆が天草を干す城ヶ島

曲淵徹雄

メトロにて待ち人来たる藍浴衣
香水の空き瓶若き日の遠く
白南風や海抜ゼロのカフェテラス

橋本京子

斎場の空澄み渡る五月かな
抽斗に仕舞ひし手紙桐の花
大夕焼あと少しだけ歩こうか

檜鼻ことは

五月富士家族写真の髭の父
亡き父の拳固は痛しソーダ―水
本棚に父の歳時記三社祭

渋谷きいち

沙羅双樹きのふの花は石の上
つゆ晴れ間両手を空へ吐息かな
父の日に三色団子買ふ母子

塩野久子

どの薔薇も名に相応しく咲き誇る
薔薇園の香り漂ふカフェテラス
客足の伸びるデパ地下夏至の雨

岡田宣子

悲し気に啼くな鴉よ夏は来ぬ
雲の峰飲み干したるぞ深呼吸
負けまいぞ女の戦パート夏

杉浦理恵

雨戸繰りコマ送りにす朧月
リモートの娘が漬ける茗荷の子
泰山木の花は揺りかご風に乗れ

菅原真理

迷ひなき道まつすぐに朴の花
まんまるき白あぢさゐへ回り道
昼顔や国際線の飛び立ちぬ

足許に侍る猫にも初鰹
手品師の助手はカルメン薔薇真紅
故郷の税のお返し缶ビール

十薬の群我世とぞ咲き誇る
さ小舟の揺らす水面や花菖蒲
濃紫陽花鬼女となりぬる木偶の姫

門前の三和土に生きる草よ夏至
齢をば重ねて経にし喜寿の夏至
濃紫陽花庭の彩独り占め

「あっつばめ」声にはならず手を振りぬ
暮れ泥む白あぢさゐの大き毬
ひそかなる喘鳴押さへ衣更

雨上りつるりぴかぴか柿若葉
ベビーカーを覗けば仔犬柿の花
紅茶待つタイマー三分梅雨に入る

鈴木玲子

父の日に山椒の佃煮瓶に詰め
手の中の宝球いとしき梅仕事
六月のボートはトレーンを引きてゆく

菅原卓郎

十薬や地下から占める白十字
十薬や観音様の脇に咲く
ひと粒の苺笑顔を誘ひけり

綿貫ひさの

ラムネ玉逢ひたき人はもうをらぬ
ソーダ水「もう半分」と笑ふ父
ソーダ水母は無色の泡となり

鈴木藻好

発芽生る消すに消せない心の灯
夏至暦朱色の文字で詰まりをる
魅せられしポピーの黄色に口笛を

山岸弘子

☆　☆

森　和子

山中いちい

小駒さち子

樋口元美

落合和枝

鼓笛集作品評

大村節代

サングラス洩らしてみたき隠し事　曲淵徹雄

人は誰しもささやかな秘密を持っている。しかし、誰も気がついてくれないと、時には自分から密かに知らせたいと思ったり、いや言わぬが花と思ったりするのであろうか。サングラスの季語がその複雑な心理を表している。

白南風や海抜ゼロのカフェテラス　橋本京子

海抜ゼロメートルとは、関東地方では荒川沿いの江東区あたりだろうか。海や川が陸地と同じか時には陸地より高い。そんな地の白南風の通り抜けるお洒落なカフェテラスから、久し振りの友との会話が続く。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解）　千坂平通

帰路に着く夜汽車の棚に夏帽子

学生時代、所属していたサークルの仲間と北海道へ合宿に行った。帰路、青函連絡船に乗り、青森駅から夜行列車自由席で東京へと向った。合宿の記憶は、すっかり消え去っているが、棚の上にひしめきあって置かれていたリュックサックや帽子は今でも残っている。

大夕焼あと少しだけ歩こうか　檜鼻ことは

日が西に沈むとき、西の空が真赤になり黄金色を帯びる、その景に誘われ、散歩の足を伸ばす。その先に極楽浄土があるのかと思いながら……。

夕焼けて西の十万億土透く　山口誓子

句集喝采

近藤徹平

◆塩野谷仁句集

ふらんす堂

著者略歴　昭和十四年栃木県真岡生。同三十七年「海程」創刊とともに金子兜太に師事、平成十一年「遊牧」創刊代表、同十九年現代俳句協会賞受賞。著書『円環』等八句集既刊他。

一月の全景として鷗二羽
禁断書ひらく遠くの闇に鹿
人類に声出すあわれ梅真白
ときどきは落武者よぎる大夏野
巨星墜つ金縷梅のまばたく宇宙
新型コロナウイルス闇に蟻無数

著者は句集の後に『「姿情一如」を求めて』を記す。芭蕉とその弟子各務支考との関係を例にとり「姿先情後」で隆盛を誇った者もおり、戦後も「姿先」を説く人もいるが、著者は「姿情一如」でなければならないと論じる。筆者は俳人たる者「姿情一如」を目指していると思うが、本句集を読みその匙加減の困難さを痛感した。第一句は帯の表題とした句で、石川青狼氏は「一月の川一月の谷の中　龍太」を想起させると解説する。第二句、禁断書から遠い鹿に思いをはせる不思議。東日本大震災と前書のある第三句の声出すあわれとはいかなる情か難解。第四句、夏野に兵たちの幻影を見る著者の情。第五句、師の故金子兜太氏への追慕の情。第五句は最近のコロナウイルスを詠み季語蟻を配して妙味がある。

◆宮崎浩枝「山茶花」

玉梓発行所

著者略歴　昭和十三年岡山県後月郡生。平成十四年大阪市老人福祉センター俳句教室で俳句の師名村早智子氏に出会い、同十八年名村早智子主宰「玉梓」に入会。俳人協会会員。

恵方道己がつけゆく己が道
追伸に山茶花咲くと母の文
山茶花は母の一番好きな花
紋付の母は百歳桜咲く
三回忌光る蛍は母かとも
彼岸詣孫を知らざる夫の墓
松竹梅に決めし着物や初句会
缶蹴の仲間に入る喜寿の夏
終活は先へ延ばして芒原

著者は「あとがき」で、夫君亡き後家業を継ぎ夫君の両親を看取ったが、後に大病したので廃業した。回復後に還暦の頃句会に入門した由。第一句は巻頭句、女手で家業を切り回した自信の句。第二句、第三句は標題句であるが著者の母堂を詠む。第四句、第五句、母堂は百六歳まで存命であった由。夫君は早世して孫を知らないので墓前へ報告か。名村早智子氏の序によれば、著者は新舞踊の名取であり、卓球の選手であった由。第六句、第七句、第八句、まだまだ終活などと納まらず、様々なことに挑戦する意気軒昂な著者と拝察した。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
境延昭報

能管の音が闇開く薪能　マスミ
遥かなる山が近づく梅雨晴間　順子
紅蓮や思惟なよらかな観世音　由紀子
信心や梅雨の祠の半開き　治子
武蔵野を被ひつくすか梅雨曇　はるみ
まくなぎや男が弱音吐く小路　延昭
梅雨寒や窓なき部屋で読む乱歩　喜恵

——以上特選

空梅雨に雨ふれふれと人のエゴ　和葉
グラマンに隠れし鎮守梅雨じめり　徹平
音感の悪さ遺伝か五月闇　はるみ
街路樹の威儀を正しく梅雨晴間　稀香
音沙汰の無きは佳きかな梅雨晴間　チアキ
銅鏡に似たる神池梅雨深し　治子
桿(かん)に触ればのぼる水音今年竹　順子
梅雨深し乾燥機はや音を上げる　理恵
梅雨寒の酒瓶包(くる)む新聞紙　延昭
梅雨曇じつと動かぬハシビロコウ　喜恵
つくばひの掬へばとろり梅雨の月　由紀子
山霊に祈る柏手梅雨晴間　マスミ
梅雨晴間竿の足りない濯ぎ物　和子

第二例会（東京本所）

山中みどり
太田絹映報

梅雨星や星を語らば光二の句　竺仙
風青しいざ進水の模型船　鶴城
田植ゑ機は阿修羅の手もて進み行く　いちい
虎が雨時計の針は進まざり　〃
不揃ひの自家製トマト皿に盛る　禮子
梅雨の星貨物列車の遠汽笛　昌弘
梅雨の川トランペットラブレター韻々と　みどり

——以上特選

鋤鍬を納屋に眠らせ梅雨の星　昌弘
星涼し話題の尽きぬ散歩道　鶴城
味噌汁に色付く茄子や今朝の膳　禮子
重き荷や空には赤き麦の星　いちい
灯りなき赤提灯や梅雨の星　敏江
猫の尾の右に左に麦の梅雨　玲子
進む世に付いて行かれぬ蟇　峰雄
抱き上げる高い高いに枇杷熟るる　竺仙
梅雨の星雪駄甚平の好好爺　みどり
進退は己が決める冷奴　絹映

第三例会（東京）

五明昇
曲淵徹雄報

一馬身抜きしたてがみ薄暑光　大場順子
赤門薄暑歩幅の広き理系女子　萬蝶
お屋敷の玻璃の歪みや薄暑光　〃
薄暑かな足の裏には庭の土　岡野順子
街路樹の風のリレーや夏来たる　喜久
青嵐たてがみ立つる尾根の径　昇
夕薄暑口開けを待つ屋台の灯　〃

——以上特選

夕薄暑鄙びた街の湯の香り　康世
しろがねのイルカに触るる薄暑光　大場順子
一瞥は別れの合図青蜥蜴　徹雄
猫の背にちらちら揺るる薄暑光　理恵
分校の廊下を走る青嵐　喜久
志那服のスリット眩し街薄暑　萬蝶
薄暑かな静かに歩む螺旋階　岡野順子
軽暖や女坂とは云ふものの　雅夫
川床の水音に脱ぐ旅薄暑　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

翡翠の水面を青き風の起つ　光子
かはせみの水面を歩く軽業師　治郎

裸婦像にテレピン匂ふ夕薄暑　延昭
ダイビングの翡翠を撮る豆博士　翔太
水切り石走る川面や薄暑光　マスミ
街薄暑銀色に塗る足の爪　恵子
薄暑断つ天井高き大本堂　寛治
火玉より生れて薄暑の玻璃の壺　喜恵

――以上特選

翡翠一閃青淵深き黙のまま　マスミ
薄暑光水面をはねる微風かな　でん治
翡翠は暗き水面を凝視せり　恵子
翡翠の一閃湖のはなやげり　順子
オートバイのエンジン唸る坂薄暑　翔太
不老菩薩拝みし寺の薄暑かな　玲子
翡翠の一瞬を待ちシャッター音　延昭
翡翠の嘴に挟める銀の魚　修
薄暑光柏手少しくぐもれり　寛治
うつくしきアニメの剣士翡翠翔ぶ　由紀子
夕明り川辺の宿に脱ぐ薄暑　昇
翡翠の一閃を待つ水の面　暦文
かはせみや光残して水の中　治郎
なまこ壁尽きて魚の香薄暑光　光子
軽暖やワクチン接種終りたる　光弥
茹で過ぎのパスタを掬ふ薄暑かな　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

たまゆらの色を尽くして濃紫陽花　義子
あぢさゐの家よりピアノ雨上る　水尾
一山の四葩華やぎ溺れけり　〃
京町屋裏庭に咲く七変化　美佐尾
青尽くすあぢさゐ多(さは)に古都の寺　佐江
シーツ振る家に出水の助け舟　〃
人柱供養の石碑梅雨出水　〃

――以上特選

和らかに喪の庭つつむ白紫陽花　玲子
紫陽花の白増し色益しわが小径　はるみ
紫陽花の咲くこの家で生まれしを　理恵
山出水崩れる木々の吠へるやに　美佐尾
魅せらるる命の紫紺濃紫陽花　水尾
七曜の庭を潤す七変化　義子
生きてゆくことのあれこれ七変化　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

雨降れば好日と云ふ桜桃忌　月を
蛍舞ふこの夜に賭けし娘追ふ　俊晴
蛍火や水の流れに迷ひあり　ひろこ
畦道を裾ひらめかせ初蛍　はるみ
遠き日の隊長は姉蛍狩り　知子
掌にとまる蛍よ妹か　千春
蛍籠秘すべき恋の無くもなし　佐江
閨怨(けいえん)の浅き眠りやほたる降る　萬蝶

――以上特選

朝蛍不眠の果ての過食症　月を
分数の苦手な子供梅雨晴間　はるみ
はかなき蛍相憐れむや蛍族　理恵
渾身の蛍の光り恋蛍　倭子
ほーたる来い甘い言葉に気を付けて　俊晴
てのひらに蛍の青き息づかひ　佐江
親族の寝息満ちゆく蛍籠　ひろこ
水の匂ひ辿り訪ふ蛍の夜　千春
田舎ぐらし蛍のために戸は開けて　知子
嫁取るも夏の朝飯分刻み　儀勝
形見分け伯母の好みの藍浴衣　慶子
手入れ良き分家の実梅百二百　マスミ
背徳は夜を待たない月見草　鶴城
カップ麺の三分長しかたつむり　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

黙浴の露天一転ほととぎす　早苗
海峡に七色帽子虹の立つ　〃
短夜や寝息うかがふナースの灯　ゆら女
稲荷祀る郭跡なる五月闇　玲子
夏蝶の乱舞いつとき地を揺らす　和子
黙考の植田の鷺に指鉄砲　道子
短夜やはや雨戸より光の矢　礼子

――以上特選

あぢさゐの渓に溺れて鰓呼吸　敦子
女湯に「男」ののれん明早し　ゆら女
疫病をしばし忘れて心太　洋子
忍冬の美しく匂ひぬ夜の卓　早苗
二条城の五月雨をきく鎖樋　玲子
時の日や学友の名も忘れ去り　千津子
短夜の夢の途切れし目覚めかな　礼子
茅葺きの庭に新車や柿若葉　千枝子
明易の河岸に活魚遅れ着く　和子
枕辺に白紙の句帳明易し　道子
青蛙声変りして戻り来ぬ　満耶子
パソコンでスーパームーン見る短夜　きわゑ

昔話あれこれ6

悲劇のヒーロ倭建命（後編その2）

后・弟橘比売命、人身御供となる

倭建命は相模国から東方に進み、走水の海（浦賀水道）を渡ろうとした時、渡の神が波を立て船を翻弄して進めなくなった。そこで、后の弟橘比売は

「私が海に入って神の心を鎮めましょう。貴方様は命じられた役目を果たし、帝にご報告なさいませ。」と言って

菅畳八重、皮畳八重、絁畳八重を波の上に敷きそこに身を置いた。そして后が歌った歌は

さねさし　相模の小野に
燃ゆる火の　火中に立ちて
問ひし君はも

（相模の小野で私達を焼き殺そうとする火の中で、私を気遣って大丈夫かと尋ねて下さいましたわね。あなた。）

こんな哀切な恋心を吐露して、弟橘比売は波間に消えた。七日後に后の櫛が流れ着いた。そこで、陵を造り櫛を納めた。

足柄の神を殺す

上総国から更に進み、蝦夷どもを服従させ、山河の荒ぶる神々を平定して都への帰路に着いた。足柄峠の麓で食事をしていた時、その坂の神が白い鹿になって現れた。それを見た倭建命は、食べ残した蒜を投げつけると、鹿の目に命中し、鹿を殺してしまった。一段落した命は坂の上に立ち、幾度も溜息をついて

「あづまはや」（「我が妻よ」）と絶叫した。

筑波問答

倭建命が甲斐の国の酒折の宮に到着した時、

新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる

と歌った。火炊きの翁がそれに応えて

かがなべて　夜には九夜　日には十日を

（常陸の国の新治や筑波を過ぎて今日までに幾夜過ごしただろうか）

（指折り数えますと、夜は九夜が過ぎ、日は十日が過ぎました）

倭建命は自分の歌に即座に応じた翁を褒めて東の国の造に任命した。

＊この片歌形式による問答体の歌は後に連歌の起こりとされ、連歌を「筑波の道」と呼ぶようになった。

（つづく）（丸山マスミ）

各地句会

柿の木塾（浦和）

思ひ切つて買ふ初物のさくらんぼ　節代
潮騒も差し潮の香も簾越し　昇
いい風ね母が呟く青簾　俊晴
さくらんぼ空がぐづぐづしてをりぬ　かつ子
青簾墨の匂ひのかすかなり　恵子
着付け終へ舞妓が分ける青すだれ　光弥
青簾二張り並ぶ師匠宅　和葉
青空にきらめく命さくらんぼ　水尾
手の平にまこと可愛ゆしさくらんぼ　和子

鶴川山百合句会（町田）

朴の花箱根八里は七曲がり　廉三
朴の花咲いて渓谷浅くせり　雄二郎
朴の花屋根の難所を励まして　月を
ゆきずりの嗜み匂ふ薄暑かな　喜久
真つ直ぐに生きよと天へ朴ひらく　史代
朴咲きて堂鳩好む葉陰あり　広子
貝ボタン二つ外して薄暑かな　知子
高層の窓反射して街薄暑　由美子
バス席を子に譲られて街薄暑　千春
街薄暑ケーキに二つ保冷剤　萬蝶
「ラン活」といふ空騒ぎ街薄暑　理恵
粛として遠くに白き朴の花　玲子

珊瑚の会（浦和）

雲海も遠嶺も染めて夜明けかな　水尾
雲海や「古秩父湾」をまのあたり　昇
雲海や白光はじむ神の杜　恵子
青き影海へ落とせり夏の月　史代
寝息たしかめやをら仰ぎし夏の月　和子
物かげに何かが潜む夏の月　広子
夏の月とろんと止まるオルゴール　和葉
雲海や孤島のやうな峰一つ　かつ子
雲海を眼下に展望カフェテラス　喜恵
雲海の音なき怒濤主峰呑む　マスミ
夏の月主人似となるロボットよ　節代

神戸大池句会（神戸）

紫蘭咲く禰宜の沓音近づきぬ　玲子
気ままなる狭庭の草木梅雨未だ　礼子
白南天赤南天も花白し　千津子
フルートの音色沁み入る凌霄花　早苗

大阪水明俳句会（守口）

朴ひらく木の教会に聴くホルン　ゆら女
やうやうにワクチン接種梅雨晴間　洋子
梅檀の花影震へる鼓動かな　智恵子
ままごとの大人の口調七変化　人美
寺裏の小径せばめてゆきの下　和子
葉ざくらに爆ぜているのは赤ん坊　敦子

花衣の会（浦和）

手に蛍両の手まるくまあるくし　みよ
蛍火や闇に落ちゆく偏頭痛　京子
蛍とぶみつよついつつむつ消えた　みち
夏木立一本道は里の道　峯雄
源平の合戦のなき蛍狩り　治
姫蛍一夜の舞ひの別れかな　章嘉

皐月の会（浦和）

麻蒲団模様は蜻蛉二匹ほど　珪子
鈴蘭の咲く玄関へ回覧板　順子
鈴蘭や精気もらひし坊泊り　紀子
風の香や鈴蘭咲ける夕の庭　静香
走り梅雨独り留守居の目玉焼　孝麿
走り梅雨たなびく雲は虹色に　久子
両親へ贈る二色の夏蒲団　暦文
夏掛の匂ひ涼やか明日は晴れ　きいち

光が丘俳句教室（東京）

面を取り剣道場の青嵐　はる
尺蠖の真つ直ぐ伸びて一休み　康子
尺蠖やスカイツリーの何の辺り　竜也
尺蠖の前屈上手伸び上手　理恵

櫟の会（浦和）

縄文杉すつくと立てり青嵐　裕之
父の日や妻に感謝の照れ笑ひ　克之
盛り砂を宙へ誘ふ青嵐　裕誌
照れる父の横顔やさし父の日よ　朋子
父の日の宴に遺影の母もゐて　富子
父の日や賑はひのない花売場　文子
父の日や明治生まれの寡黙さよ　富美子
青嵐ライン下りの船煽る　彰二
カーブミラーにうねり溢れて青嵐　千重子
父の日や父に感謝の俳句道　治子

りんどう俳句会（浦和）

門灯へ羽音すさまじ蛾の夜襲　弘夫
若竹の器に銘酒師の卒寿　紀子
若竹や生気溢るるチアガール　寛治
禅堂の魚鼓を打つ音今年竹　徹雄
玻璃窓を狂ひて打つや火取虫　正信
火取蛾や車窓に金の箔を押す　卓郎
掃きし蛾のぱたぱたたたと這ひ出せり　君夫
今年竹故郷思ひ母思ふ　典子
秒速でタイムを競ふ今年竹　治子
もしかして蝶になりたき蛾の脱皮　利子
荒ら屋の軒を貫く今年竹　翔太
若竹や赴任は遥か肥後の国　サヨ子
皮脱ぎし秘色の素肌今年竹　順子

青葉の会（浦和）

三輪車乗り廻す子や梅雨晴間　美紗子
梅雨晴や生まれたてなる空の青　真理
梅雨晴やてんてこまひの一日過ぐ　美智枝
薄紅の昼顔のごと恋終はる　美子
最果ての島がかすかに昼顔咲く　啓子
梅雨晴や一気に伸ぶる畑野菜　公子
痴話喧嘩見ざる言はざる梅雨晴間　和子
梅雨晴に洗車待ち受け夫の声　洋子
網繕ふ漁師の周り昼顔や　輝翠

新樹の会（浦和）

梅雨晴の盛り塩固く形良く　京子
憧れの表参道夏帽子　道を
帰路に着く夜汽車の棚に夏帽子　平道
梅雨晴間白一色の縁の先　修
夏帽子肩越し覗く大道芸　清吉
屋根を越し視界一瞬梅雨晴間　鶴城

りそな俳句会（浦和）

天に星地に蛍火の静寂かな　久美子
三社祭喧嘩結びのをんな達　道を
三社祭揉んで丸ごと江戸の風　暦文
蛍火の指のすき間に小宇宙　建治郎
大団扇コロナを飛ばせ三社祭　勲
手に残る蛍の匂ひ柔らかし　寛治
清らかな水面奏でる蛍かな　京子
担ぎだこ自慢浅草祭かな　雅夫
浅草つ子の鰯背を競ふ三社祭　マスミ

若鮎句会（浦和）

ひらがなの風のこゑきく薄暑かな　亮一
新樹光太極拳の無重力　芳春
新樹下のガラガラの音乳母車　早苗
夕薄暑窓辺によりて風を待つ　香音子
野地の石新樹の青に染まりけり　喜夫
首元に女の齢薄暑かな　稀香
鬢付の力士薄暑のバス乗場　みえこ
足薄暑流るる水にそろそろと　夕峰
現実か淡淡光る蛍の火　幸代
雷鳴に探しあぐねて現在地　順
白き蛾をとぢ込める檻樹の枝　万美
ハチの奴が泣きべそをかく夕薄暑　月を
鋸屑の匂ひ野良着に夕薄暑　鶴城

たかんな俳句会（川口）

青嵐ビバルディ「四季」の音になり　久美子
さつきからサンバのリズム青嵐　のり子
老いてなほ祝の鰻謝して食ふ　福　美
青嵐三年日記の十冊目　小　麦
青嵐鏡の中の木々の揺れ　勢津子
方丈の池面波立つ青嵐　和　子
予想的中爺の仕掛けし鰻筒　義　子
自転車のギアを一段風青し　鶴　城
鰻食む満点の星給料日　真知子
野の色を裏返しゆく青嵐　水　尾
行きずりの君に似し人青嵐　静　香

若狭水明会（若狭）

仏前へ新茶の湯気と香を点てり　初　花
天を見て地を見て新茶ひと含み　和　風
仏壇に供へ新茶のなほ薫る　白　鷺
道よぎる手虫のスピードいとほしむ　冬　至
新茶揉む節榑立ちし祖母の手よ　保　人
一服の新茶に浸る至福かな　鼓
講釈を聞き流しつつ新茶汲む　郁　子
麦秋やバス待つ婆の背負籠　寛　久
花鋏置きて新茶の人心地　ことは
走り茶を荷物に添へし親心　祥　子
毛虫焼く団塊世代の日曜日　想　子

野ばらの会（浦和）

休業のパティシエいやいや草取りす　夏　江
麦の秋胎児すくすく臨月に　栄　子
膝に年輪ありあり刻む草むしり　治　江
早起きの夫の日課や草むしり　茂　子
筑波嶺の大パノラマや麦の秋　秀　子
産土のうどん逸品麦の秋　和　子
草取の前と後ろの別世界　みき子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

更衣のマドンナにある種痘痕　延　昭
青嵐鳩の着地を狂はせる　倶　子
紫陽花のクスクス笑ひ雨止まず　俊　晴
部屋いつぱい一人のための更衣　淑　子
四阿の木椅子の湿り著莪の花　正　信
大人びる見舞ひの子らの更衣　早都子
生粋の笑ひ上戸やはじき豆　美枝子
爆音を吸ひ込む空や「ル・マン」夏　千恵子
威を誇る島主の墓石著莪の花　昇

水明小川句会（小川）

老農夫煮しめた色の夏帽子　み　や
梅雨入りや電車の軋み重き音　きよ子
短夜や夢見る間さへありやしない　綾　子
蛍火やはらりと羽織る木綿シャツ　栄　子

芽吹句会（浦和）

矢を放つ鞍の少年青嵐　千重子
皆既月食待つも無粋に梅雨の空　チアキ
鉄線花法事帰りの一つ紋　富　子
ハンモック雲上人の心地かな　修
夕映えや細波寄する植田の面　玲　子
湯上りの刀自の眼光鉄線花　ひろこ
草深き老舗旅館の鉄線花　道　を

俳句の手ほどき（岩槻）

品書は女将の小筆鱧の皮　延　昭
ところ天胸のつつかへ解消す　倭　子
まくなぎの一途な恋にまみれけり　佐　江
まくなぎや旅の初日の無言館　ます美
七夕にねがふ品性世の平穏　慶　子
海中へ禊幾度荒神輿　水　尾
砂に書く君の名前よ夏の海　美佐尾
工房の窯の余熱や風薫る　義　子
夏来る富士五合目のハイヒール　徹　平
武家屋敷の練塀のぼる蟻の兵　翔　太
五月雨や客待ち顔の招き猫　忠　男
夏歌舞伎子役の見得に拍手沸く　美　子
招かれて声も若やぐ苺摘み　幸　代
ブランドの絹のハンカチ昭和かな　卓　郎
その中の品よく美しき踊笠　かつ子

ミモザの会（横浜）

昼顔や駅のホームに波の音　亜弥子
昼顔とあくびの彼のツーショット　慶子
十薬の蔓延る家に人のなし　栄子
昼顔の明日も開花と目を閉ぢる　知子
昼顔やまとはりつきし末娘　由美子
校庭より「パプリカ」の歌風青し　玲子
あの日にはもう戻れない浜昼顔　萬蝶
灯台の下僕となりぬ昼顔は　史代
寄り添ひて咲く昼顔よ無縁塚　千春

円卓の会（浦和）

梅を干す頃合ひの日よ母来たる　輝翠
青梅やほんのり頬を染めし頃　道を
羅を粋に合はせし後ろ髪　修
緑さす故郷の山よ安吾の碑　翔太
羅の人囁きぬ桟敷席　静香
父の日のわが父わが子わが孫よ　月を
命を受け生まれてきたの仏法僧　鶴城

蝌蚪の会（浦和）

塾帰り娘迎へる火取虫　信一
青嵐大仏様の端然と　朝香
夏至の朝ストーンヘンジ人招く　さち子
眼前の敵見抜けずに火取虫　ひさの
夏至の夜明りの漏れる町工場　宣子
昼休み絵日傘たたみ遠会釈　元美
恋ふものに焼かるる幸や火取虫　礼子
盲僧の琵琶の釈文夏夕べ　るみ子
身を焦がす燭蛾の本気鎮魂歌　鶴城
灯は一つ火蛾の無数を数へけり　月を

繭の会（浦和）

単線の交換待ちて額の花　京子
遠き雷話そこそこ別れたり　トエ
ペダル踏む背後に迫る雷雨かな　孝男
海あををくれてやつたか額の花　粉雪
雷鳴や目を丸くする猫撫でる　悦子
傘をさす子の列進む額の花　信一
うかつにも女性専用車に雷火　月を
額の花竹槍を突く頭巾の子　鶴城

水明熊谷句会（熊谷）

薫風や札所詣での前座歌手　徹平
植ゑ付けし水田にそそぐ風の香　正行
公園にチェロの音響き風薫る　和子
口遊むラビアンローズさくらんぼ　秀子
絵手紙の笑顔たをやかさくらんぼ　燈女
姿見を慕ひ薫風背よりくる　治江
決勝の選手整列風薫る　栄子
空弾き凌霄かづら色尽くす　茂子

きざきサークル（浦和）

葉陰にて行水の音美女らしき　喜代子
行水も昭和も遠しシャワー浴ぶ　倶子
ラムネ飲み胸のつかへがすつと消ゆ　啓子
行水や時も忘れて潔斎す　和枝
行水や過ぎたる一羽水しぶき　かつ子
飲み干してうるさき程にラムネ玉　和子

櫻蔭句会（浦和）

月見草一際高く咲く河原　道子
窓開き父は天河へ月見草　公子
歌ひ出すやうに解けり月見草　由紀子
梅雨寒に草木はすつくと背をのばし　千恵
狛犬をなづる風あり月見草　茂子
スーパームーン照らす浜辺に月見草　美智枝
羽織りても手足寂しき梅雨寒よ　真理
梅雨寒や完成目指し絵筆執る　多美子
病棟にナースの灯月見草　幸代

芙蓉句会（浦和）

十薬や前後左右に道の端　正子
五月闇呼び止められし友の声　道子
町工場小さく灯して五月闇　悦子
東叡山仏堂けぶる梅雨の闇　仁
五月闇テールランプの帰り着く　美子

雛の会（浦和）

梅雨晴れや窓全開にコーラス部　喜恵
草引けば生臭き香の漂へり　チアキ
宿浴衣始めの一歩郡上の夜　輝翠
金輪際寡婦を貫き草を引く　佐江

桜林句会（大宮）

青梅雨や磴を濡らして奥の院　知子
青梅雨や蔵はおしやれなカフェテラス　光子
駅構内明るさ目立つ衣更　光代
梅雨晴間戸板一枚露天商　美佐尾

山茶花（浦和）

冷麦や今日も巣籠りひとりの餉　泰子
夕映えに勢いや増す雲の峰　マスミ
雲の峰「おーい」と呼んでみたくなる　光子
冷素麺行列出きる老舗店　しず子
タクシーの補助券確と雲の峰　清一
冷麦の色数本に思案せり　美江子
雲の峰ブルーベリーの育つ山　綾子

あゆみの会（浦和）

単衣着てうなじをすつと風の抜け　和
七変化瑠璃の雫を葉にこぼす　朋子
径覆ひ友を隠せし七変化　重子
単衣着て猫背姿の己かな　山遊
単衣着てきびきび動く若女将　圭子
七変化庭の主役になりすます　藻好

和歌山水明句会（和歌山）

夏のれん黒地に白抜き酒どころ　和子
解体のせまる山門梅雨夕焼　道子
手の甲の覚えなき傷夏薊　千枝子
朝一番のワクチン接種梅雨の晴　千世子
短夜やこつそり開くる袋とぢ　満耶子
夏の霧地球丸ごと包みけり　きわゑ
瑠璃色の紫陽花回廊密避けて　洋子
将軍塚へ喘ぐ近径ほととぎす　廸代

水明松本句会（松本）

閉ざす戸にゆふすげの花揺れやまず　恒子
峰を這ふ夕立雲に風さわぐ　陽子
トッピング変へて今夜も冷奴　マリス
雨上がりあぢさゐの色ひとしづく　玲子
ラベンダー少女すらりと門に入る　寿子

☆　☆

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　主宰　山本鬼之介

[指導者] 網野月を
[作　品] 5句　[受講料] 1,000円
[方　法] ①用紙自由　②住所・氏名・電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
[送付先] 網野月を　電話 048－862－5926
〒336-0025　さいたま市南区文蔵1-13-3-401

りんどう忌のご案内

【と　き】 2021年9月23日（木曜日・秋分の日）

【ところ】 浦和駅東口パルコ

10階第13集会室

投句数および兼題、投句締切、会費、申し込み等の詳細については、次号9月号にてご案内申し上げます。

事業部

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2021年9月号

生誕120年！
特集 草城・草田男・不死男・誓子の時代
○総論～それぞれの時代　青木亮人
○この時代だからこそ生まれた名句
日野草城…伊丹啓子
中村草田男…横澤放川
秋元不死男…坂口昌弘
山口誓子…角谷昌子
30句選と論考

特別作品30句　亮井雉子男

〈グラビア〉俳句界NOW　本田攝子

『歌枕』再発見！～歌を味わう
◎総論～「歌枕」とは何か　中西　進
◎近代の歌枕　松村正直
◎鑑賞　坂本信幸　栗木京子　大下一真
高木佳子　荒木優也　寺島博子　後藤由紀恵
久々湊盈子　キム・英子・ヨンジャ
※セレクション結社　「紫」山﨑十生

私の一冊　阿比留初見「冬野」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！
玉川奈々福（浪曲師）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

水明塾のご案内

【と　き】 2021年10月29日（金曜日）
午前の部（水明集作家対象）９：00受付
午後の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）
13：30開会

【ところ】 浦和駅東口パルコ10階第13集会室、および
９階第15集会室

申し込みなどの詳細については、今後ご案内いたします。

※午前の部は全句講評講座、
午後の部は神野紗希講師をお招きしての講演会になります。

事業部

最近の名句集を探る
座談会
有原雅香『鳩の居る庭』
石嶌　岳『非時』
野中亮介『つむぎうた』
〔司会〕筑紫磐井　大西　朋　黒岩徳将　松本てふこ

◉巻頭三句
遠山陽子
松尾隆信
古賀しぐれ
山下美典
山本鬼之介
吉川禮子

◉今月の華
鶴岡加苗
堀田季何

◉その時、俳句手帳
和田華凜

◉俳句と短歌の10作競詠
月野ぽぽな
江戸　雪

◉好評連載
藤枝リュウジ　575の散歩道
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　手のひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季
Haiku Shiki
2021年9月号
8月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/
東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

風声

○**現代俳句**六月号――「『現代俳句年鑑二〇二一』を読む」欄

長谷川はるか氏の感銘十句抄に

朝時雨小鳥のやうに生きてみる　網野月を

○**現代俳句**六月号――「現代俳句の風」欄

噴水と体内時計通ひ合ふ　菊池ひろこ

風鈴は鳴りをひそめて部屋の中　川島典虎

適塾に血気の名残夏旺ん　五明　昇

帆舟さながら白蝶運ぶ蟻の列　近藤徹平

目で叱る次男のやんちや夏来る　町野広子

早立ちを促す京の朝ぐもり　丸山マスミ

○**現代俳句**六月号――「『現代俳句の風』秀句を探る」欄

川村暮秋氏の感銘十句抄に

噴水と体内時計通ひ合ふ　菊池ひろこ

島田星花氏の感銘十句抄に

早立ちを促す京の朝ぐもり　丸山マスミ

瀬川剛一、中村道子両氏の感銘十句抄に

目で叱る次男のやんちや夏来る　町野広子

○**草笛**（太田土男代表）六月号――「受贈誌一詠」欄

陽炎の中へ融けゆく別れかな　**鬼之介**

○**くぢら**（中尾公彦主宰）六月号――「受贈俳誌美術館」欄

鼓笛隊進む林道みどりの日　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）六月号――「受贈俳誌紹介」欄

軍神の家系の庭ぞ春の雪　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）六月号――「一誌一耀」欄

霾や月琴飾るショーケース　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）六月号――「諸家近詠」欄

浄瑠璃の艶物のあと春の雨　**鬼之介**

○**鳩の子**（柴田多鶴子主宰）六月号――「受贈俳誌拝見」欄

陽炎の中へ融けゆく別れかな　**鬼之介**

○**卻**（山本一歩主宰）六月号――「受贈誌の一句」欄

帆曳船風にまかすや白魚漁　渋谷きいち

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和三年六月三十日現在―

笹本啓子　3口
森田祥絵　50口
波多野寿子　10口
渋谷きいち　3口
高原和子　3口
内田恵子　10口
加藤イツ子　3口
大塚茂子　3口
川野妙子　12口
大村節代　10口
野田静香　5口

水明全国大会

保坂翔太　1口
河野はるみ　1口
丸山マスミ　2口
五明　昇　3口
大場順子　2口
曲淵徹雄　2口
星野和葉　1口
大村節代　2口
石山かつ子　2口
石井喜恵　2口
茂木和子　3口
山中みどり　5口
井口俊晴　10口
柚木治子　20口
佐々木典子　20口
山本鬼之介　5口
山田美佐尾　2口
石田慶子　2口
神田治江　2口
鈴木和子　2口
越田栄子　2口
大塚茂子　2口
染谷正信　5口
日高道を　3口
梅澤輝翠　3口
西幅公子　5口

―合計221口―

誤植訂正

七月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○七六頁中段

正　若松例○会

誤　若松句×会

後記

暑中お見舞申し上げます。

夏の鍛錬会「夏行」が十一月に延期になりました。今年は休止や延期になった会が沢山あります。

そのような中で、六月末の全国大会を開催。（詳しくは九月号に掲載）。大会では受賞の皆様が本当に輝いて見えました。

特に多勢の応募者から選ばれた新珠賞受賞の仲田利子、本橋稀香、新暦文のお三方は、全国大会にご出席は初めてなのでしょうか。とても嬉しそうでした。本号の三氏の句と染谷正信、茂木和子、日高道をの三氏が新珠賞の方々の人となりの紹介の文をお読み下さい。今まであまり存じ上げなかった三人の方々の人となりや俳句に取り組まれる姿勢等が伝わり、感心して読ませて頂きました。

水明では、水明晴れ、紗一晴れ、光二晴れ、鬼之介晴れと代々の主宰の神通力によって、行事の折は殆ど晴れました。ところが今年の全国大会は前日から雨が大降りで当日も止みそうもありません。しかし大会が始まると、雨が止んで、次第に陽が射してきました。いやあ天晴れ、鬼之介晴れです。

大会も滞りなく終って、最後の挨拶で私は「……雨が上がりましてもお足元が滑るところがあると思います。お気をつけてお帰り下さい」と申し上げました。

お笑い下さい。それから一週間後に、私は石に躓き転んで、顎に五センチ大の黒痣、日頃は不快なコロナのマスクに救われました。

編集部の皆様が「顎の骨が砕けなくてよかった」「もう少し上だったら鼻や歯が骨折した」と慰めて下さいました。何となく不幸中の幸いと思いました。ありがとう皆様。

おっちょこちょいの私が申し上げるのもおこがましいのですが、どうぞ、コロナにも、足元にも、お気をつけ下さい。

（節代）

今月のはてな？

香薷散（こうじゅさん）
弌（いち）
水照（みで）り
三尸（さんし）
翻車魚（まんぼう）
州走（すばしり）
鏝絵（こてえ）
蔓延（はびこ）る
汗手貫（あせてぬき）
尉鶲（じょうびたき）
西班牙（スペイン）

68 59 55 51 51 47 35 35 24 21 15 頁

水明発行所受付時間

曜日：（月・水・金）
時間：午後１時〜午後５時
（火・木・土・日・祭日は休み）
水明の行事と重なった時は休み
（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和三年八月号
通巻一〇九一号
令和三年八月一日発行

発行人 山本鬼之介
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一一七一一八
電話 048-886-六〇〇三

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一一〇一二
電話 048-822-四七四一

誌代 半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇-〇-一九二三九三

印刷所 中央美版

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

十一月号　八月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

十一月号　八月二十五日締切

八月の兼題　「蜩」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

時の日や当てにならぬは腹時計　星野和葉
南天の小花に力直に立つ　茂木和子
野の色を裏返しゆく青嵐　矢作水尾
色褪せしあぢさゐを切る花鋏　山中みどり
信心や梅雨の祠の半開き　柚木治子
短夜や寝息うかがふナースの灯　由良ゆら女
国生みの島に片足虹立てり　森本早苗
能管の音が闇開く薪能　丸山マスミ
若狭路の今日も雨呼ぶ濃紫陽花　原田想子
網打ちの男立ちさる沈下橋　森川義子
一馬身抜きしたてがみ薄暑光　大場順子
京町家裏庭に咲く七変化　山田美佐尾
寂寞と喪の家つつむ梅雨の月　井上玲子
薄命の蛍の中にィみて　田中章嘉
径塞ぎ「ゆつくり観よ」と七変化　河野はるみ
赤門薄暑歩幅の広き理系女子　正木萬蝶
夏めくやホルンの響く上高地　近藤徹平
鳥よりも早起きの夫草をとる　大塚茂子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道＜身辺トピック＞

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明＜随筆＞

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

幾度も目高を覗く母待つ子　越田栄子
海峡の大橋越えて初蝶来　保坂翔太
遠ざかる一片の雲楠若葉　曲淵徹雄
真つ新なベッドシーツや夏きざす　原田秀子
夏草に手を泳がせて河畔まで　横山君夫
暗闇の明かき一点薪能　反町　修
赤銅の漁師の胸や大南風　染谷正信
夏始め机上に想ふ峰の色　塩野久子
遠雷の火を消しにゆく消防車　神田治江
玄関に小さき靴や豆御飯　渋谷きいち
葉桜のトンネル歩き思索かな　鈴木和子
薪能情念燃やす篝籠　村杉清吉
夏霞窯出しの朝竦む足　梅澤輝翠
御簾越しになほ美しき夏木立　丸屋詠子
船頭の唄に寂あり卯波立つ　橋本京子
夏霞沖に釣舟のまれ行く　笹本啓子
牡丹生け姿勢正して座りけり　新　暦文
葉桜や窓全開の大掃除　加藤でん治

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン（パルコ10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋廸代	森本早苗

水明　令和三年八月一日発行　毎月一日発行
（第九十四巻　第八号）　定価　一〇〇〇円